
偶然という名の奇跡 5 ～雨と風邪と夢と魔法～Complete Version

城ノ内 ジョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然という名の奇跡5 雨と風邪と夢と魔法 Complete
Version

【Nコード】

N2238K

【作者名】

城ノ内 ジョウ

【あらすじ】

季節が春から夏へと変わる六月のある日。雨音とともに主人公の元へと訪れた小さな事件。それは雨に端を発する夢と魔法の物語だった。

ブログ side-N

さて。新学期早々起きた妙な事件から、一ヶ月の時間が経過したが、事件についての記憶がだんだん薄れてきて、振り返ってみるといい思い出、などと適当なコメントをつけられるようになってきてはいない。あれは、大変だった。面倒というより大変だった。

正直今のクラスになって最初からあれだったわけで、先行き不安なことこの上ない。もうクラス替えをしてもらいたいね。今度は地味で真面目なやつばかりのクラスに俺を混ぜてもらいたい。事件というのは、ある程度キャストがそろったところに起こるものだ。どんな天才的な大怪盗がいても、天才的な名探偵がいなければそれは大事件にはなりえないわけで、逆もまた然り。つまり、地味で真面目なやつしかいなければ、そこには地味で真面目な日常しか生まれない。至言である。

愚痴っぽくなってきてしまったので、私語はここまでにして、そろそろちゃんとブログを始めよう。冒頭で言ったが、新学期に起きた事件から一ヶ月が経過した。現在は五月下旬である。そろそろ梅雨に入るこの季節は夏なのか春なのか微妙な季節である。

この時期に気をつけなくてはならないのは、病気である。季節の変わり目は気温の上下が激しく、体調管理が難しい。気をつけなくてはならない時期である。これは余談だが、五月病とは関係ない。五月病とは周囲の環境の変化とそれに伴う精神的ストレスが原因なので、我々高校二年には関係ない話である。新社会人とか新入生とかがなるわけであって、五月の連休直後にかかる妙な脱力感とは無関係だ。ましてや、病と呼ばれているからといって、風邪やその他の病気と同じ位置づけではない。

また話が逸れてしまったので戻すでしょう。季節の変わり目というのは時代の移ろいに関係なく、やはり体調不良になりやすい時期なようだ。一応言っておくが、俺の話ではない。俺はここ四・五年、風邪はおろか病気の類にかかっていない。きつと俺の体の辞書は病気という言葉が消去したのだろう。しかし、周りの連中は違ったということだ。

そして事件は起こった。いつもと同じ、ある日の平日のことだった。

その日、岩崎が学校を休んだ。

プロローグ side—I

私は風邪を引いてしまった。

今朝起きたら何やら頭が重い。のども痛いし、熱っぽい。病は気からというけど、掛け布団が重く感じてしまうほどの体調不良。さすがに風邪であることを自覚してしまった。

これではしょうがない。私は学校が大好きなのだが、今日は休むことにしよう。こんな調子で行っても周りに迷惑をかけるだけだ。今日一日休み、しっかり治して明日行くことにしよう。

私はすぐさま学校に連絡を入れ、担任の先生に風邪を引いたから学校を休む旨を伝えた。

とりあえずやることをやった。今は眠ることにしよう。私は再び布団にもぐりこんだ。

Part. 1 side - N

担任の話では風邪らしい。朝のホームルームでそう言っていた。何でも本人から直々に連絡があったらしい。今時欠席の連絡をするやつがいるのか。今更ながら律儀なやつである。真面目が服を着ているみたいなやつだからな。仮に真面目が物理的なものとして存在していたとして、そいつに口をつけて足を付けたら、それはもう岩崎である。それが、俺の岩崎に対する印象である。悪いやつではないのだが、俺は岩崎ほど真面目じゃないので、いろいろと付き合わされると正直つらい。

仮病なんてことはないだろう。嘘をついてまで学校を休むとは思えないからな。むしろ逆によほどの高熱が出ているのだと思う。そうでなければ岩崎が欠席なんてするわけがない。今年の風邪はそれほど性質が悪いのか。俺も気をつけなければならぬかもしれない。それにしても。

「……………」

何とも静かだな。何度も言うが、俺はあまり仲のいい友人がいない。十年來の腐れ縁、麻生は別のクラスだ。つまり岩崎がいないと、俺の日常はこんなにも静かで穏やかなのだ。一年ほど前まではこれが本当に日常だったのだが、ここ最近、これほど静かな日はほとんどない。何となく懐かしい気がするのは気のせいじゃないだろう。俺は満喫することにする。岩崎が風邪で欠席することなど、そうあることじゃない。現に、高校に入ってから初めてのことである。もちろんTCCは休業だ。久しぶりに早く帰ることができる。帰ってからやることを前倒しに出来るから、今日は早く寝ることができるだろう。

「……………」

しかし、何だ、この違和感。胸の中にあるもやもや感は。気持ち悪いな。

「岩崎さん、大丈夫かな？」

ふと、隣の席の住人真嶋綾香が呟く。その呟きはおそらく俺に向けてのものだろう。

「大丈夫だろ」

根拠はないが、風邪程度に岩崎がやられるとは到底考えられない。寝込んでいる姿も想像できない。

「でも岩崎さんが欠席するなんて……。風邪、相当悪いんじゃないかな……。心配だなあ」

何やら深刻そうに呟き、目を伏せる真嶋。こいつもつくづく真面目である。

「ねえ、成瀬も心配でしょ？」

心配なんてするわけない。と、すぐに返事することができなかった。なぜ？もしかしたら、この胸の違和感。俺は岩崎を心配しているのか？

「心配、ねえ」

口に出してみる。が、よく解らなかった。

「お見舞いとか行こうかな」

真嶋が若干暴走し始めたところで、俺は思考を停止した。考えても解らないものは解らないのだ。こういうことは時間が解決してくれるはずだ。

「止めておけ。移されるぞ」

「あんた、本当に薄情者だね。いつも岩崎さんにお世話になってるでしょ？」

「迷惑をかけられている、の間違いだ」

「岩崎さんじゃなくて、あんたが病気になるばよかったのに。岩崎さんに移されればいいのよ。そうすれば岩崎さんの病気も治るかもしれないしね」

「お断りだ」

あいつがかかった病気など、得体が知れない。何といってもあの岩崎を行動不能に追い込んだウイルスだ。俺が感染したら生死に関わるかもしれない。

と、ここで俺の危険探知能力が覚醒する。嫌な予感がする。現在俺の嫌な予感は、天上知らずな勢いで的中しまくっている。ノストラダムスなんて目じゃない。今となっては天気予報よりは確実に上であると断言できる。嬉しくないが、どうやらまたしても俺に悲劇が待っているようだ。今度は何だ？せめて三時間半の超巨編でないことを祈るぜ。

「そうか、岩崎が風邪を」

昼休み、俺は麻生のクラスに赴き、岩崎の欠席を伝えた。

「ま、当然だと思うが、今日のTCCは休業だ。俺も帰るつもりだから、放課後何か予定入れていいぞ」

まあ放課後にでも伝えればよかったわけなのだが、情報の伝達はできるだけ早いほうがいい。そんなに手間というわけではないのだから、昼休みに来てやったのだ。

「それはいいんだが、俺は委員会の仕事があるんだよ」

そういえばこいつは図書委員会に所属していたな。似合いもしないのに。まあ、女子と仲良くなれるかも、などという不純な動機でうかつに委員会などに入ってしまったことを嘆くんだな。言うまでもないが、俺は無所属である。俺がやらなくてもいいことを、率先してやるほど俺はできた人間でも偽善者でもない。

昼休みなこともあって、麻生のクラスの連中は弁当を広げて食事の真っ最中というやつが多い。俺は麻生を廊下に呼び出したわけだが、ふと教室を覗くと、一人の女子生徒と目が合う。こいつは図書委員会での麻生の相手であり、今年度の始めに一悶着あったときの関係者である。目が合ってしまったし一応挨拶らしきことをしておこうかな、といった感じで右手を軽く挙げ、適当に手を振ってやるそいつは、そっけない感じではあるが、始めたしゃべったときより格段にフレンドリーな対応をしてくれている。俺は苦笑いを返すだけにとどめておく。

「とにかく、そういうことだから」

俺は無理矢理まとめにかかった。何となくこれ以上ここにいると話しかけられそうな気がしたからだ。

「了解。しかし岩崎が風邪ねえ」

俺の気持ちを無視して（もちろん口には出していない）、麻生は呟いた。何だ、その意味
深なセリフは。

「ちょっと心配だよな。見舞いにでも行くか？」
「遠慮する」

真嶋がそんなことを言っていたから、二人で行ってきたらどうだ？しかし、いくら岩崎とはいえ、風邪程度で大袈裟ではないだろうか。現在自宅療養しているのだ、すぐに治るだろうよ。無理して出てきているのなら話しは別だが、殊勝なことに欠席しているんだから平気だろ。そう、無理してなければな。

授業が進み、俺の静かな日常が終わりに近づいてきたそのころ、文字通り暗雲が立ち込めてきた。今にも雨が降ってきそうな黒雲が、学校の真上を覆っている。嫌な天気だ。

「成瀬」

突然声をかけられて、俺は窓の外から視線を移す。いつの間にやら始まっていたホームルームの最中、声をかけてきたのは真嶋だった。

「何だ？」

「さっき岩崎さんにメールを送ってみたんだけど、返事がないの」

「眠っているだけじゃないのか？」

「そうかもしれないけど、あたしやっぱり気になるんだ」

こいつがこんなにも世話好きだったとは知らなかったね。岩崎が伝染したんじゃないか？

「だからあたし、お見舞いに行ってくる。成瀬も行かない？」

どいつもこいつもそんなに岩崎が気になるのか？ご苦労なことだ。

「俺は遠慮する」

俺の言葉に対して、真嶋は、

「そう……」

と一言口にすると、それ以上何も言っていなかった。

「お大事にと伝えておいてくれ」

真嶋と話をしている間にホームルームは終わり、放課後となった。真嶋や三原・戸塚を始めとするクラスメートたちと適当に挨拶を交わし、教室を出て下駄箱に向かうと、そこから見る風景は雨模様だった。とうとう降ってきてしまったか。雲の様子や雨の強さから考えると、とてもじゃないがしばらく止みそうもない。仕方ない。雨宿りという選択肢は切り捨て、帰るとするか。雨の中歩くのは好きではないのだが。

俺はかばんから折り畳み傘を取り出すと、自宅へ向かって歩き始めた。

そこで俺の頭の中を嫌な予感が通り抜ける。またかよ、一体何だ

って言うんだ。何かを警告してくれるのはありがたいのだが、詳細を教えてくれないと、何の対策も解決策も思い浮かばないんだが。無闇に怯えさせるのは親切とは言えないぜ。

一旦足を止めそうになったのだが、ここにいたって仕方がない。俺はため息をつきつつ、一路、家に向かって歩くのだった。

ここで一つ解ったのは、どうやら嫌な予感の原因は学校ではなく、家のほうにあるみたいだ。珍しいパターンだな。どうでもいいが、あくまでも家のほうであって家自体に原因がないことを祈る。家に現在の俺の恐怖の対象があるならば逃げるできないからな。

しかし、俺の直感は当たるのだが、役に立っているのか、いまいち不明だな。

役に立っているのか不明なのは、俺の頭の上にある折り畳み傘も同様だ。持ち運びに便利とはいえ、何だってこんなに小さいのだ。これでは下半身はおろか、上半身すら守れていないではないか。すでに俺の制服のスラックスは雨が浸みてきていて、内側の生地が足にまとわりついてきている。気持ち悪いったらない。これだから雨は嫌いなのだ。折りたたみは小さいし、かと言って普通の傘を持つていくのは面倒だ。結局一日を通して雨が降らなかったことを考えると、何となく持つていくのを躊躇われるし、すっかり晴れてしまっているのに傘を持つている自分を想像するとちょっとした恐怖である。この辺りでようやく考え始める。今日は厄日なのではないかと。

その一 side I

しばらくして目が覚める。朝より頭も布団も重くない。多少は回復したのだろうか。時計を確認すると、時刻は午後一時。皆はちょうど昼休みだ。今日の授業はどんな内容だったのだろうか。私は授業を真面目に聞かないと不安でしやうがない。明日学校に行ったら誰かにノートを見せてもらおう。そして夜予習復習をしよう。そうでもない、彼に追いつくことはできない。

そこでふと思い出してしまった。今日はどんなことを話しているのだろうか。去年も同じクラスだったが、彼が誰かに話しかけている風景はあまり見たことがない。話しかけるのはいつも私から。もしかしたら、今日は静かでないな、とか考えているかもしれない。私はため息をつく。彼は一人でいるのが好きなのだ。それは知っている。学年が上がってクラスが変わったときは本当に孤立していた。彼は何でもないような顔をしていたが、私としては気になった。

でも今違う。ある事件によって彼はクラスメートと仲良くなった。彼はそう表現しないと思うけど、もう立派に友人と呼べるだろう。きつと今ごろ机を囲んで昼食を共にしているかもしれない。私がいなくとも彼は孤立してはいないだろう。私がいなくても、彼は居場所を確保しているだろう。ワタシガイナクテモ……。

私は急に不安になった。私の居場所は？そう聞かれれば即座にこう答える。彼の隣だと。しかし、今私は彼の隣にいない。彼の隣には別の人がいる。このままでは私の居場所がなくなってしまう。私は無意識的に立ち上がっていた。彼の元に行こう。行きたい。

それからが大変だった。体のほうは思った以上に回復していたため、普通に歩くことができたが、洗面台に行って鏡を見て愕然とした。そこにはとてつもなく不細工な私が映っていた。病氣なのだからしょうがないと言えばそうなのだが、こんな顔では彼の元に行けない。お化粧をして、服装もきちんとしたものに着替えたら、何とか見れるようになったが、正直これが限界だった。でもしょうがない。

外に出てみると雨が降っていた。さすがにまずいかもしれないと考えたが、この程度で諦めないのが私だ。風邪薬もしっかり持っている。しっかり暖かくしている。病は気からだ！私は寮から飛び出した。全ては私の居場所を取り戻すために。

再び体調が悪くなってきたのは、寮を出て比較的すぐのことだった。さすがに雨の中歩くのはつらかった。限界だと感じたが、引き返すことは考えなかった。私はタクシーを呼びとめ、それに乗り込んで彼の家に向かった。

家に着いたときには完全に風邪がぶり返していて、頭がふらふらしていた。オートロックをどうにかかわして、中に入る。目指すは彼の部屋。おそらく彼はまだ帰ってきていないだろうから、部屋の前で待たせてもらおう。

私は部屋の前に来るなり、ドアにもたれかかって座ってしまった。そこで意識は途切れる。

Part. 2 side - N

雨に対する愚痴が、いつの間にかこの世に対する八つ当たりに変わってきたころ、俺はようやくマンションに到着した。

自動ドアをくぐり、エントランスに入る。雨から解放されたことに、何となくほっとする。しかし、思ったより強かった雨により、俺の身体はびしょびしょである。頭しか守れていないこの折り畳みの傘ではどうにも防ぎようがなかった。どうして濡れることに対して、人はこれほど不快感を覚えるのだろうか。

どうでもいいことを考え始めた俺は、そろそろ限界だった。早いところ着替えないと、さすがの俺でも風邪を引きそうだ。

俺は傘を畳むと、オートロックを解除しエレベーターに乗り込んだ。目指すは自分の部屋だ。

エレベーターを降りたところで、俺はまたしても奴と遭遇を果たした。嫌な予感である。やはりというか何というか、俺の嫌な予感とはとん当たる。原因が家でないことを祈ったらこれだ。俺は思わず回れ右したくなかったが、そんなことをしてもどうしようもない。今までどおり面倒ごとと対峙するしかない。俺は部屋を目指して歩を進める。

そして、俺は足を止めた。そこはもう玄関の目の前だ。二・三步でドアに手が届く。しかし、そのドアの目の前に人が座っていた。そして、そいつのことを俺は知っていた。

俺は去年の九月に起こった、これまた面倒な事件を思い出してい

た。確か笹倉のときも、俺の家の前から始まったのだ。あのときの笹倉はかなり様子がおかしかったが、目の前にいるこいつも、とてもじゃないが普通とは言えないな。

俺はそいつの前にしゃがみこみ、そいつの顔を覗き込んだ。体育座りのようにドアにもたれかかって座っているそいつは、眠っているようだが、楽しげな夢を見ているとは到底思うことができないような、辛そうな表情をしている。こいつ、いつからここにいたんだろうか。

「おい」

俺は軽く頬を叩く。起こさないという選択肢も俺の中にはあったのだが、如何せんドアにもたれかかっているのだ、起こさなければ中に入れない。

「……ん」

どうやら起きたらしい。

「あ……、成瀬さん。お帰りなさい……」

暢気な第一声を放ったそいつの声は、元気なときのバカでかい声と似ても似つかないほど弱々しいものだった。

「学校サボって何しているんだ？」

どう控えめに表現しても、明らかに衰弱している。

そこにいたのは岩崎だった。

いつからここにいたのか、いまいち不明ではあるが、どう見ても風邪が治ったからここに来た、という様子ではない。逆にこの雨模様の外の外出で悪化してしまったのではないかというのが俺の見解である。

「午前中はちゃんと横になっていたんですが、時間が経つにつれてだんだん独りでいるのが苦痛になってきてしましまして……」

これは俺の問いに対する答えだろう。照れているのか、自嘲気味に笑うその笑顔にも、やはりいつもの力強さが無い。

「……来ちゃいました」

「……冗談も休み休み言え」

俺はもう呆れるしかなかった。開いた口が塞がらないとはこのことだ。バカだバカだと思っていたが、ここまでだとは思ってもよらなかったね。

岩崎がいつもの状態であれば、自分がどれだけバカで愚かで考えなしであるかを、言葉の限りを尽くして説教してやろうかと思った。

が、止めた。何度も言うように、今のこいつはいつもの状態ではない。今言っても最後まで耐えられそうにないし、どうせ覚えてもいないだろう。聞いてもらえない説教ほどむなしなものはない。やれやれ。

俺はため息をつくつと、

「立てるか？」

岩崎に肩を貸して、起こしにかかった。

「す、すみません」

岩崎は真っ赤な顔で侘びの言葉を口にした。謝罪の言葉などいないから、二度とこんな無茶をしないでくれ。なぜだが知らないが、あんたが無茶をすると俺に被害が及ぶ。それが現在の世の中の仕組みらしい。そう考えると、侘びの言葉を素直に受け取れなかった。

いつそのこと追い返してやろうかと思ったが、外は雨が降っている。こんな中一人で放り出したら、大袈裟ではなく死んでしまう。それ以前に、仮にも病人である岩崎に対してそこまで邪険にすることは、さすがの俺もできやしない。

とりあえず、

「気にするな」

と言い、岩崎の身体を支えながら家の中に入った。

今すぐ着替えたかったが、まずは岩崎を何とかしないことには、自分のことに移れない。俺は岩崎を寝室に連れて行くと、洋服ダンスを漁った。何か着替えるものは……。とりあえずこれでいいだろう。スウェットを上下取り出すと、岩崎に手渡す。

「これに着替えろ」

そう言い、部屋を出た。この女、今にも死にそうな顔をしているくせに、しっかり余所行きに着替えてここに来ているのだ。さすが

にそんな格好で寝かせるわけにはいかないし、それ以前に少なからず濡れていた。スウェットはもちろん俺のものが、仕方ないだろ。文句なんか言わせないね。

岩崎が着替えている間、俺は薬を探すことにする。先ほど少し歩くのも辛そうにしていたので、おそらく着替えにもそこそこの時間がかかるだろう。

うーん、ないな。考えてみればここ何年も俺は風邪を引いていないのだ。薬などあるはずがない。あつたとしても一体いつのか解らないような年代ものだけだろう。さすがにそんなものを飲まずわけにはいかない。

それでもしばらく探し回ったところ、体温計だけは発見した。これも現代的なものではなく、小さいころ世話になっていたようなアンティーク物だったが、ないよりはましだろ。

体温計だけ持って寝室に戻ると、

「あの、成瀬さん……」

全く何を考えているのだろうか。岩崎がドアを開けて、そこから顔だけ出して俺のことを待っていた。

「あの、着替えましたけど……」

見れば解る。と、普段なら言うところだが、今日は止めておく。

「そうか」

そう一言口にして、寝室に入った。

「探したんだが、薬は見つからなかった」

「あ、それなら私が持っていますよ」

岩崎は自分のかばんから錠剤タイプの薬を取り出して見せた。今考えれば、容易に思いつきそうなことだった。

「とりあえず体温計っておけ。今水を持ってくるから」

「……はい」

俺は部屋を出ると、台所に向かった。屋内に入ってから若干体調が落ち着いたように見える。さすがに外での待ちぼうけは堪えたのだろう。そりゃ当然だ。元気な状態でもいつ帰って来るか解らないようなやつを待つのは堪える。とりあえず早く帰って来てよかった。日が暮れてから、今より悪化した状態の岩崎が玄関先で横たわっていたら、さすがの俺もパニック状態に陥って、条件反射的に119に電話していただろう。

俺がペットボトルに水を汲み、部屋に戻ると、岩崎はベッドに入り、体温計とにらめっこしていた。

「計ったか？」

「はい」

「何度だった？」

「さ、三十七度五分でした」

意外に低いな。と、思ったのは一瞬だ。

「嘘をつくな」

「え？」

俺は岩崎の額に手のひらを当てた。

「三十九度、ってところか？」

「何で解るんですか？」

もちろん解るわけない。ただのハツタリだ。若干高めに言ったのだが、まさかそんなに高温だったとは。

「こんなときに嘘をつくな」

「でも、私の感覚的には本当にそんな感じですよ。あまり辛くないです。きつとじつとしていればすぐによくわかりますよ」

それも嘘だな。おそらく心配かけまいとしているのだろうが、それならこんなところまで来ないでほしい。じつとしていなかったからこうなったのだろうか。岩崎が精神的に強いのはずいぶん前から知っている。おそらくそれと同じくらい身体も強いのだろう。逆に俺はそんなに強くない。もし次に麻生あたりがうちの前で倒れていたらショック死してしまう。それに、あまり辛いなら人の家の玄関先で倒れるな。

「強がりはいい。それより薬を飲んで早く寝ろ」

それからしばらく、岩崎は自分がそこそこ元気であるというアピールをしていたのだが、それが聞こえなくなったと思ったら、寝ていた。先ほどと違って呼吸も寝顔も穏やかだと思ったのは俺の気のせいではないだろう。

俺は自分の着替えを手に取ると、静かに部屋を出た。

その二 side I

「おい」

私はそっけない声に起こされた。正直顔を上げるのがつらい。あまり顔を叩かないでもらいたい。私は女の子なのに。

「……ん」

私はゆっくりと目を開ける。するとそこには私の待ち人がいた。私は何て言おうか迷った結果、

「あ……、成瀬さん。お帰りなさい……」

声が出なかった。心配をかけないように、暢気なセリフを選んだのだが、これでは逆効果だろう。

「学校サボって何しているんだ？」

「午前中はちゃんと横になっていたんですが、時間が経つにつれてだんだん独りでいるのが苦痛になってきてしましまして……」

言っていて自分で情けなくなってしまった。嘘でももっとましなことを言えばよかった。私は思わず自嘲的に笑ってしまった。

「来ちゃいました」

すると彼は、

「……冗談も休み休み言え」

どうやら私は呆れられてしまったようだ。そりゃそうだろう、と私も思う。普通はこんなことしないだろう。私は学校を休んでいるんだ。自分でも非常識な行動だと思った。

彼はため息をつくと、

「立てるか？」

と言って、肩を貸して起こしてくれた。私は思わず顔が熱くなった。近い。近すぎる。不謹慎な気がしたけど、こんなことを考えられるくらいには余裕があるのだと、心のどこかで冷静に分析している自分がいた。

「す、すみません」

「気にするな」

許してくれたというより、呆れてものが言えないといった感じだった。

彼に支えられて、私は寝室に入った。私は今すぐにでも横になリたかったが、勝手に横になるわけにもいかず、彼の指示を待っていると、

「これに着替えろ」

と言って、彼はたんすからスウェットの上下を差し出した。思え

私は完全に余所行きの服だった。確かにこんな格好では寝苦しいかもしれない。というか、私はこの服装で、地面に腰を下ろしていたのか。つらかったとはいえ、ハンカチくらい下に敷くべきだった。お気に入りの服なのだからなおさらだ。

彼が部屋から出て行ったのを見て、私は着替え始める。やはりタキシードに乗ったことは正解だった。あまり濡れていない。私はほっと息をつき、脱いだものを畳んで、今出してもらったものに袖を通す。

「……………」

普段は何てことない着替えという動作がとてもつらい。風邪とはこんなにもつらい病だったのか。

私は何とか着替えを終え、そこで待機していた。が、彼はいつまで経っても来てくれない。私は心配になり、少しでもドアを開ける。するとすぐに彼を確認できた。一安心。

「あの、成瀬さん……」

そこまで言って、私は言うべき言葉がないことに気がついた。そこで、

「あの、着替えましたけど……」

と言った。当然見れば解る。こんなこと報告する必要ないだろう。きっと彼もそう思ったに違いない。冷たい言葉が掛けられると思うのだが、彼は、

「そうか」

とだけ言って、寝室に入ってきた。

「探したんだが、薬は見つからなかった」

どうやら彼はいろいろ探し物をしていていたようだ。時間がかかったのも納得。

「あ、それなら私が持っていますよ」

私は自分のかばんから錠剤タイプの薬を取り出してみせる。それを見た彼は、軽く頷くと、

「とりあえず体温計つとけ。今水持ってくるから」

そう言って、私に古めかしい体温計を手渡した。これは私が小さいころに使っていたものと酷似している。こんなアンティーク、正常に動くのだろうか。

「……はい」

私が返事をする、彼は再び部屋から出て行ってしまった。張っていた緊張の糸が少し緩む。ふう。私は言われたとおり、体温を計る。今時のものと違って、しばらく時間がかかる。その時間、私はどんどん体調が悪化しているように感じられた。しょうがないので、床に座らせてもらう。

そして、待つこと三十秒ほど。体温計がチープな電子音を上げ、計測完了を告げる。そこに映る数値を見て、私は軽くめまいがした。

三十九度。未だかつてこんな高熱出たことがない。原因は二つ。雨の中の徒歩と玄関前での待ち。やはり相当無理をしていたらしい。確かにつらかった。この私が地べたに腰を下ろして、意識を失ってしまうのだから。

私が体温計を見つめたまま、一人反省会を開いていると、寝室に彼が帰ってきた。そして、

「計ったか？」

「はい」

「何度だった？」

正直聞かれたくない。さすがの彼も心配するだろう。もしかしたら病院に連れて行かれてしまうかもしれない。私は迷わず嘘をつくことにした。

「さ、三十七度五分でした」

私が決死の思いでそう言うと、彼は頷いてくれた。信じてくれたのか？と思った直後、

「嘘をつくな」

「え？」

全く信じてくれていなかった。私はなんと言って誤魔化そうかと考えていると、彼は私に手を伸ばしてきた。そして、私の額に、彼の手のひらが当たる。

私は急激な体温の上昇を感じた。顔が熱い。

「三十九度、ってところか？」

「な、何で解るんですか？」

彼の行動に、私がいくつか作っていた嘘の出番は消されてしまった。私の頭は今何も考えることができない。私の頭は、額に当たる彼の手のひらの感触に支配されている。彼の手のひらが冷たくて心地いいと感じてしまうのは、おそらく私の体温が上昇し続けているからだろう。私は爆発してしまうのではないか。

「こんなときに嘘をつくな」

彼が額から手を離すと、私の熱は急激に下がった。こうして私は爆死の危機から免れた。

「でも、私の感覚的には本当にそんな感じですよ。あまり辛くないです。きっとじっとしていればすぐによくなりますよ」

そして再び正常に動き出した頭脳を使い、私はこんな言い訳じみたことを言ったのだが、彼の反応はいつものため息だった。

「強がりはいい。それより薬を飲んで早く寝ろ」

そこまで一瞬で看破されてしまったのは、さすがに気分がよくないので、本当に元氣だとしばらくアピールしていたのだけど、彼は全く取り合ってくれなかった。怒った私は不貞寝することにした。最初は狸寝入りのつもりだったのだけど、しばらくすると本当に眠気がやってきて、あっさりと眠りについてしまった。

Part. 3 side - N

それから四時間くらいが経過した。現在午後八時。俺は寢室を訪れた。まだ寝ているかもしれないが、一応ノックをする。

「あ、はい。どうぞ」

返事があった。どうやら起きていたようだ。俺はドアを開けて中へ入る。

「いつから起きていたんだ？」

「六時くらいからですかね」

「それから一睡もしていないのか？」

「はい……。何だか緊張してしまって……」

もう何度もうちには足を運んでいるだろう。寝泊りだったこともある。今更緊張などするだろうか。

とにかく、それでは二時間くらいしか寝ていないじゃないか。俺はベッドの横にしゃがみこみ、尋ねる。

「それで、体調はどうだ？」

「さっきより大分楽になりました。すみません、迷惑かけました」

「侘びはさっき聞いた」

俺は体温計を手渡す。最新のものではないので少々時間がかかる。

「そろそろ夕飯時だが、何か食べられそうか？」

かく言う俺はすでに夕飯を済ませたのだが。

「はい。おなか減りました」

寝ているだけだったというのに、よく言いやがる。とはいえ、そう言うだろうと思っていたので、すでにおかゆは製作済みである。

「じゃあ持ってきてやるから」

そこで、体温計がチープな機械音を上げ、計測完了を告げる。

「何度だ？」

「三十七度九分です」

さっき計ってから一度以上下がっている。どうやら落ち着いたようだ。その数値が本当なら、の話だが。

「見せてみる」

俺は体温計の提出を要求すると、

「今度は本当ですよ」

こう言いつつ、岩崎は体温計を身体に抱え込むようにして、俺の要求を拒んだ。それじゃ、真意を確かめられないではないか。

仕方がないので、俺は先ほど同様、岩崎の額に手のひらを当てた。確かに若干下がったように感じる。すると岩崎は、

「ね、本当に下がっていましたよね」

などと言い、体温計を渡してきた。確かに岩崎の発言とおりの数値が表示されていた。始めから渡しやがれ、手間かけさせやがる。

俺が思い切りため息をつくとき、岩崎は楽しそうにくすくす笑った。

どうやらからかわれたみたいだ。本当に面倒なやつだ。ま、それほど回復したということだろう。

「じゃあ夕飯の支度をしてくる。ちょっと待ってろ」

そう言って俺が立ち上がり、部屋を出ようとすると、

「あ、あの成瀬さん。できればリビングで食事したいのですが……」
「何で？」

「あの、ここだと少し落ち着かないもので……」

さっきも同じようなこと言っていたな。何で今更そんなことを言うのだろうか。ベッドの上で食事をするのが嫌なのだろうか？

「駄目だ。病人は布団の上から動かないものだ。これ以上迷惑かけたくなければ大人しく待っている」

おかゆを持ってくると、待ってましたとばかりに岩崎が手を叩く。どうやら熱だけではなく、体調的にも回復したようだ。ま、いいことなんだけどね。

俺はお盆ごと、岩崎の膝の上に乗せてやった。

「ありがとうございます」

「水は足りているか？」

俺はペットボトルを見て言う。中身はほとんどなくなっていた。返事を待たずに再び部屋から出て行こうとすると、岩崎は、

「あ、水はいいので、い、一緒にここにいて下さい……」

人は弱ると急に心細くなるという。だからと言って一駅以上離れた他人の家に来るのはどうかと思うが、これくらいなら許してやろう。

俺はきびすを返して、ベッドの脇に座る。

「成瀬さんは食べないんですか？」

「俺はもう食べたんだ。遠慮しないで早く食べ」

「はい！いただきます！」

手を合わせてそう言うと、岩崎はれんげを持ち、食事を始めた。

「熱いから気をつけろ」

と言ったときにはすでに口に入れてしまった後だった。岩崎は何事か、はふはふ言っていたが、おそらく

「そういうことはもっと早く言って下さい」

と言ったのだろう。

「それで、いつからここにいたんだ？」

「えっと、だいたい二時くらいに寮を出たので、二時半くらいでしようか」

すると、俺が家に帰ってくるまでの約一時間半、ああして外で待っていたと言うのか。全くご苦労なことだ。俺と岩崎はクラスが同じなので、今日の時間割くらい知っていたはずである。つまり、今日は何限まであって、何時くらいこの家に帰ってくる、というところまで予測が立てられたはずだ。それなのに一時間もこんなところで待っていたということは、無計画でここにきたということが解る。もしかしたら普通の時間に帰ってこない可能性もあったのだ。どうせなら連絡を入れてくれればよかったのだ。

「あんた携帯は持っていないのか？」

「ああ、そういえば、家に忘れてきてしまいましたね」

「化粧はしっかりしてきているのに、か？」

と言っても、いつもどおり薄くしているだけなのだが。

岩崎は黙り込み、顔を真っ赤にした。どうやら驚いているらしい。おそらく俺が気付いていないとでも思っていたのだろう。

「そんなどうでもいいことばかり考えているから、考えなくてはならないことを忘れるんだ」

「ど、どうでもいいことではありません！女の子にとってはかなり重要なことなんです！成瀬さんには解らないことでしょうけど！」

「食事中に叫ぶな」

これでは真嶋のメールに返事がないことも納得できる。余計な心配かけやがって。もちろん真嶋に対して、である。

「あんたの携帯に、真嶋からのメールが入っているはずだ。心配していたぞ」

「そ、そうですか。これは悪いことをしてしまいました……」

そういえば麻生も心配しているようなこと言っていたが、まあそれはいいか。うーん、何か他にも忘れていたようなことがあったような気がするな。思い出したら言おう。

「成瀬さん、電話貸して下さい」

「何で？」

「決まっています。真嶋さんに連絡をするからです。心配かけて申し訳ありませんと、伝えたいんです」

本当に律儀なやつだな。しかし、

「後にしろ。それより先にさっさと飯を食え。おかゆが冷めると不味いぞ」

岩崎は思い出したように手元を見ると、急いでかき込み始めた。そして、

「まだ熱いと思うけど」

またはふはふ言って、残り少ない水を一気に口に含んだ。

「はふー。ご馳走様でした。おいしかったです」

「そりゃどうも」

それからものの十分ほどで食事を終えた岩崎は、満足そうにベッドに寝転んだ。

「食ったあとすぐに寝るな」

「いや、落ち着いてしまつて。ようやくここにも慣れてきましたし」
「そういえばさっきもそんなこと言っていたな。」

「もう何度もうちには来ているだろう。慣れるも何もないと思うが」
確か、寝室にも入ったことがあつたはずだ。俺が拒絶しているにもかかわらずな。

「いえ、確かにこの家にはずいぶんお世話になつていのですが、」
ここで言葉をつまらせた岩崎は、若干迷つていゝように見える。
気のせいかな、熱が高かつたとき並に顔が赤い。

「何だ？」

「あ、あの、匂いが」

「におい？」

確かにスウェットのほうはずいぶん前に洗濯したきりでダンスの肥やしになつていたので、防虫剤の匂いがしつかりついてしまつていゝかもしれない。だが、そんなに気になるようなものではなかつたはずだ。

「何の匂いだ？」

「そ、その……。成瀬さんの……」

俺の匂いだと？それはスウェットではなく布団のほうか。うーん、考えが及ばなかったね。確かにここんとこ天候に恵まれなかったから、洗濯も乾燥も出来ていない。俺の匂いとしっかり解るほど臭うのか。いや、こいつに関して俺は悪くないはずだ。うちには来客用の布団などないし、寝かせるといったらこいつしかない。だいたい、アポなしでやってきたお前にベッドを貸している優しい俺が、体臭のこととでやかく言われねばいかんのだ！

「あ、別に嫌と言っているわけでも、臭いと言っているわけでもありませんよ！」

言い訳を聞こうじゃないか。

「こうして、成瀬さんのスウェットを着て、成瀬さんのベッドで成瀬さんの布団に包まれていると、成瀬さんの匂いが私の周りに充満していて……」

意味が解らない。結局何が言いたいんだ？

「だ、だから何となく、な、成瀬さんと一緒にベッドインしているような気がして……」

俺は岩崎の頭を叩いた。

「な、何するんですか！女の子に！」

「やかましい！何が女の子だ。変な妄想もいい加減にしろ。それと、あんたの妄想に俺を巻き込むな。何が一緒にベッドインだ。高熱が出て頭に気味の悪い虫でも湧いたか？」

「わ、私だって本気でそんなこと思っていたわけじゃないですよ！ただ、そんな感じがすると、あくまで感覚を言葉で表現しただけで、

だから、私は落ち着かないって……」

何を言い出すかと思えば、呆れるしかなかった。何というか、悪寒がする。寒気がして、鳥肌が立ったね。むしろ頭に來たくらいだ。そこであること思ひ出す。

「まあ、それは置いておいて。とりあえず元気になったようだな」

「はい。おかげ様で」

俺は岩崎が口を閉じる前に、もう一度頭を叩いた。

「な、何ですか！もう変なこと考えていませんよ！私はお礼を言っただけで」

「このバカ野郎」

何か言い途中だったようだったが、岩崎の口は開いただけにとどまり、言葉は出てこなかった。

「何考えてやがる。学校を休むほどの高熱出したやつが、雨の中外をうろうろするな」

「……………」

「しかも雨の中、一時間もあんなところで寝てやがって、肺炎にでもなったらどうするんだ。今でも肺炎は怖い病気なんだぞ」

「すみません……」

「たかが風邪だって見てびっていると、痛い目見るぞ。今日は俺がたまたま早く帰ってきたからよかったものの、麻生あたりとどっかうろうろしていたら三十九度じゃすまなかったかもしれないんだぞ」
「……………」

俺に説教されるなんて、一体どれだけこいつは間抜けなんだ。ま

だ何か言ってやろうかと思ったが、本当に申し訳なさそうにこうべをたれる岩崎を見て、開いた口からはため息しか出てこなかった。

「とにかく、こんな無茶は二度としないでくれ。俺に迷惑をかけたくないんだったらな」

「はい、すみません……」

今日岩崎がやった行為がどれほど危険だったか、一番理解しているのは岩崎自身だろう。だからこれ以上言うのは止めておく。というのは建前で、今の岩崎を見ると、これ以上言いたくなかった。

岩崎は泣いていた。俺の説教が怖かったからではないだろう。おそらく俺の言葉が岩崎の何かに届いたのではないだろうか。

俺はもう一度ため息をつくと、岩崎にタオルと携帯電話を渡した。

「真嶋に連絡入れてやれ。そういえばお見舞いに行くとか言っていたから、かなり心配しているだろう」

「そ、それを先に言ってお下さい……」

しばらくしゃくりあげていて涙を流していた岩崎だったが、すっかりとした口調で真嶋と謝っていた。

その三 side I

次に起きたのは辺りがだんだんと暗くなってきたころだった。時計を確認すると、午後六時過ぎ。何時に寝たか、はつきりと覚えていなかったけれど、おそらく二時間は寝ただろう。時間としては大した睡眠ではないのだけど、私はずいぶんすっきりした気分になっていた。頭の痛みも大分引いていて、気持ちも楽になっていた。

すると途端にいろいろなものが見えてきた。ここは本当に寝室と呼ぶにふさわしく、勉強机すらなかった。おそらくここは寝起きと着替えをするための部屋なのだろう。ベッドと筆筒・クロゼットしかない。つまり勉強部屋は他にあるということだろうか。彼は高校生の一人暮らしである。にもかかわらずなぜこんなに広い部屋に住んでいるのだろうか。家庭の事情にあまり首を突っ込んではいけないと思い、深く追求したことはないのだが、前々から気になっていたことだ。筆筒だってシンプルだが、安物には見えない。このベッドにしても布団にしても私が寮で使っているものより、ずっといいものだ。彼は毎日こんないい布団で寝起きしているのかと思うと、少し頭にきた。そこでふと気付く。

彼が、毎日、寝起き……。

「……………」

ついに意識してしまった。もう知らん顔することはできない。私の顔は急激に熱を帯びる。一瞬熱がぶり返したのかと思ったが、そんなことではもちろんない。

私は途端に落ち着きをなくした。どうにも落ち着けない。今、私の周りは彼の匂いで充満している。出会ってから、もう一年以上の付き合いになるけれど、ここまで彼を近くに感じたことはない。顔が熱い。きつと私の顔は真っ赤だろう。このままではまた熱が上がってしまうのではないか。加えてここはベッドの上、布団の中なのだ。そこで彼の匂いに囲まれて。なぜか緊張してしまうし、恥ずかしくてしょうがない。

私はもう一度寝ようと、布団をかぶりなおす。しかし、思い切り逆効果。私は何度も寝返りを打ったり、水を飲んだり、とにかくいろいろしたのだが、結局落ち着きを取り戻すこともできず、眠ることもできなかった。

そのまま二時間、無駄に疲労を蓄積して過ごしてしまった。午後八時を回ったとき、部屋のドアがノックされた。

「あ、はい。どうぞ」

私が返事をする、と、彼が部屋に入ってきた。

「いつから起きていたんだ？」

「六時くらいからですかね」

「それから一睡もしていないのか？」

「はい……。何だか緊張してしまって……」

私の言葉に、彼は若干眉をひそめる。私の言っていることが理解できていないのだろう。私だってビックリだ。この部屋には幾度となく訪れた。泊まったこともある。違いはこのベッドで寝たか否かだけだ。

その事実を再び感じてしまい、顔を赤くした私のそばに彼がやってきて、しゃがみこむと、

「それで、体調はどうだ？」

と尋ねてくる。

「さっきよりは大分楽になりました。すみません、迷惑かけました」

今思うと、我ながらとんでもないことをしたと思う。雨の中帰ってきたら、ドアの前で誰か倒れていたのだ。彼の動揺は半端じゃなかったと思う。私としては、今更ながら申し訳ない気持ちでいっぱいになり、何度謝っても足りないように感じていたのだが、

「侘びはさっき聞いた」

と、彼はそっけなく答えた。彼は謝られるのがあまり好きではないみたいだ。それに、彼は鈍感を極めたように、感謝や罪悪感に疎い。私の罪悪感や、突然来たにもかかわらず、不満を口にせずに、しっかりした対応してくれたことに対する感謝など、全く知る由もないのだ。それが謙遜ではなく、本心であるのだから、もっとちゃんと侘びや感謝を伝えたい私としてはとても困る。

例によって、本気で気に留めていないような態度で、私に体温計を渡してくる。私は、納得行かない気持ちを抑えて、体温を計った。

「そろそろ夕飯時だが、何か食べられそうか？」

「はい。おなか減りました」

寝ていただけだというのに、私のおなかは激しく自己主張していた。恥ずかしいと嘆くべきなのか、元氣が出てきたと喜ぶべきなのか、恋する乙女としては非常に微妙なところである。

「じゃあ持ってきてやるから」

どうやらすでに製作済みである様子。こう答えるとバレバレだったようだ。食に対する執着が強いと思われていることを嘆くべきなのか、私のことをよく理解してくれていると喜ぶべきなのか、恋する乙女としては非常に微妙なところである。

そこで、体温計がチープな機械音を上げ、計測完了を告げる。

「何度だ？」

「三十七度九分です」

先ほどから一度以上下がっている。確実に体調は良くなっているようだ。私は安心した。しかし、

「見せてみる」

彼は信じてくれない様子。私は書いてある数字をそのまま読み上げたのだが、そう言われると、少し頭にきた。そして、私は思いつく。

「今度は本当ですよ」

私は体温計を身体に抱え込むようにして、彼の要求を拒んでみせた。彼は、私の行動を見て眉をしかめる。おそらく彼は、私の言った数値の真偽を確かめるために言ったのだろう。なのに、私は体温

計の提出を拒んだ。すると、彼が取るべき行動は一つに絞られるだろう。

彼はため息混じりに、私の顔に向かって手を伸ばす。そして、額に手のひらを当てた。先ほどとは違い、彼の手のひらの感覚が額を通して、鮮明に伝わってくる。傍から見ると分にはとてもきれいで、女性のそれと見違えるような整った見た目をしている彼の手だが、実際はやはり男性の手で、女性の手よりは少し硬い。私はまたしても顔が熱くなった。考えてみれば、これだけ近くにいるのに、手に触れたのは今日が初めてかもしれない。それともあまり意識していなかっただけなのだろうか。

そんなことを考えていると、彼は手を離れた。何か言わなければ。私の行動に、不審を抱かれてしまう。

「ね、本当に下がっていましたよね」

こう言って、彼に体温計を渡した。彼は体温計に目を落とした後、私を軽くにらみつけていた。あまり見かけない彼の様子に、私は思わず笑みを漏らしてしまった。

すると彼はため息をついて、

「じゃあ夕飯の支度をしてくる。ちょっと待ってろ」

と言って、立ち上がった。ということはここで食事をしなければならぬのか。私は未だこの官能的な空間に慣れることができていない。

「あ、あの成瀬さん。できればリビングで食事したいのですが……」

「何で？」

「あの、ここだと少し落ち着かないもので……」

彼は一人暮らしだ。寝具はこのベッドしかないだろう。寝るのは我慢するとして、食事をする場所くらい、別にしてもらいたい。でなければ、私の熱はこのまま下がることがないだろう。私は精一杯真摯にお願いしてみたのだが、

「駄目だ。病人は布団の上から動かないものだ。これ以上迷惑をかけたくなければ大人しく待っている」

と、見事に断られてしまった。確かに今立ち上がって熱が上がってしまっただけは意味がない。すでに多大な迷惑をかけてしまっているのに、さすがに逆らうわけにはいかず、不本意ではあったけれど、ここは頷かざるを得なかった。

彼が来るまで、ベッドの中で布団に包まっていたのだが、考えることは彼のことがわかりだった。しかし、彼がおかゆを持ってくると、その匂いで少しの間忘れることができた。何しろおなか为空いていたため、本当に嬉しかった。

私はベッドの上で起き上がり、その膝の上に彼がお盆ごとおかゆを乗せてくれる。

「ありがとうございます」

「水は足りているか？」

その言葉と同時に彼はペットボトルを見た。その中身はほとんど残っていなかった。私は思わず、彼の袖を掴んでいた。そして思わ

ず、

「あ、水はいいので、い、一緒にここにいて下さい……」

と言ってしまった。恥ずかしい。反射的な行動と言動とはいえ、こればかりは恥ずかしすぎた。今日の私は本当にどうかしている。熱が出て、学校を休んだだけで寂しくなってしまう、一駅以上離れた彼の家に来てしまっている。加えて今のこと。正直、瞬間的な体温の上昇が急激過ぎるし、激しすぎる。

これ以上ない愚行をしてしまった私は、己の愚昧さを嘆いていたのだが、私の発言を受けた彼が、ベッドの隣に腰を下ろした。彼は今の発言について、どう考えているのだろうか。そんなことをチラッと考えてしまったのだが、すぐに頭を振り思考を飛ばした。これ以上妄想してしまうと、頭が爆発してしまう。適当に話を振って、違うことを考えよう。

「成瀬さんは食べないんですか？」

「俺はもう食べたんだ。遠慮しないで早く食え」

「はい！いただきます！」

我ながら下手な演技だったと思う。これでは落ち着きをなくしてしまっていることがバレバレである。万が一、下手な演技を信じてくれたとしても、これではただの食いしん坊だ。大して動いていないのに、喜んでおかゆにかぶりつくなんて、恋する乙女にふさわしくない。

そんなことを考えながら、私は勢いよくれんげでおかゆを掬った。そして、口に運ぶ。その直後、

「熱いから気をつけろ」

その助言は意味を成さなかった。注意してくれたのはとてもありがたかったのだが、すでに手遅れだ。私は熱さに耐えられず、口を開ける。口に入れたおかゆをはふはふしながら、

「そういうことはもっと早く言って下さい」

と言ったのだが、おそらく彼には届いていないだろう。彼は私の怒りをさらっと無視して、

「それで、いつからここにいたんだ？」

「えっと、だいたい二時くらいに寮を出たので、二時半くらいでしょうか」

やっとの思いでおかゆを飲み込み、私は質問に答えた。

「あんた携帯は持っていないのか？」

と言われて、考える。そういえば家を出てから携帯電話を見ていない。かばんを探してみたけど、やはりなかった。落としてしまった可能性もあるけど、携帯電話を持って寮を出た記憶がないので、おそらく忘れてきてしまったのだろう。

「ああ、そういえば、家に忘れてきてしまいましたね」

「化粧はしっかりしてきているのに、か？」

彼のこの言葉に私は閉口。この人、こういうことには気付くのか。おしゃれ関係には全く無頓着かと思っていたのだが。

私が黙っているのをいいことに、

「そんなどうでもいいことばかり考えているから、考えなくてはならないことを忘れるんだ」

こんなことを言い出した。これにはさすがに黙っているわけにはいかなかった。

「ど、どうでもいいことではありません！女の子にとってはかなり重要なことなんです！成瀬さんには解らないことでしょうけど！」

一体誰のためにお化粧をしているかと思っっているのだろうか。もちろん自分のためではあるけど、その次に彼のためである。しかし、解っている。彼の言っていることはもっともだということを。先に連絡を入れておくべきだったかもしれない。

「食事中に叫ぶな」

食って掛かった私に対して、彼の対処はいつも冷静。彼は私のことを少しは考えてくれているのだろうか。何で携帯電話を忘れるくらい冷静でなかったにもかかわらず、お化粧は忘れなかったか、ちゃんと解っているのだろうか。きつと疑問に思っても考えることを放棄しているのだろう。考えるだけ無意味だと。

そんな私を尻目に、彼は話を続ける。

「あんたの携帯に、真嶋からのメールが入っているはずだ。心配していたぞ」

「そ、そうですか。これは悪いことをしてしまいました・・・」

これに関しては本気で反省した。私の体調を心配してくれた人に対して、返信をしないと余計に心配させてしまう。

「成瀬さん、電話貸して下さい」

「何で？」

「決まっています。真嶋さんに連絡をするからです。心配かけて申し訳ありませんと、伝えたいんです」

「後にしろ。それより先にさっさと飯を食え。おかゆが冷めると不味いぞ」

「まだ熱いと思うけど」

またしても遅い忠告に、私の口の中は大変なことになってしまったのは言うまでもない。

「はふー。ご馳走様でした。おいしかったです」

「そりゃどうも」

全然喜んでいないような返事をする。私としては本気でおいしかったのだ。味以外の何かを感じたようで、彼の私に対する気持ちの一部が流れ込んできた感じがした。おそらく気のせいだと思うけど。しかし、そんな私を尻目に、

「食ったあとすぐに寝るな」

いつもどおり私の行動に対して、冷静な非難をしていた。

「いや、落ち着いてしまって。ようやくここにも慣れてきましたし」

実際先ほどまでは緊張し続けていたのだ。変に意識してしまったからはなおさらだ。本当に気持ちが楽になってきたような気がした。ただ、正直緩みすぎてしまったのかもしれない。

「もう何度もうちには来ているだろう。慣れるも何もないと思うが」
言われて気がついた。思わず本音が口からこぼれてしまった。

「いえ、確かにこの家にはずいぶんお世話になっているのですが、
何て誤魔化そうか、必死になって頭を働かせたのだが、

「何だ？」

彼に真顔で問い詰められて、

「あ、あの、匂いが」

またしても思わず本当のことを言ってしまった。

「におい？」

「何の匂いだ？」

「そ、その……。成瀬さんの……」

聞いた彼は、一瞬納得したような表情になり、そしてすぐに眉をしかめて、不機嫌そうな表情を作った。

「あ、別に嫌と言っているわけでも、臭いと言っているわけでもありませんよ！」

私は訂正した。冷静に考えてみれば、こんなこと言われていい気持ちになる訳がない。誤解で嫌悪感を抱かれたら、私としてもかなり気分がよくないので、

「こうして、成瀬さんのスウェットを着て、成瀬さんのベッドで成瀬さんの布団に包まれていると、成瀬さんの匂いが私の周りに充満していて……」

と一生懸命説明したのだが、ここまで口にして気がついた。

「だ、だから何となく、な、成瀬さんと一緒にベッドインしているような気がして……」

どっちにしても、嫌悪感を抱くのではないだろうか、と。

実際、案の定だった。

「な、何するんですか！ 女の子に！」

言った瞬間、頭をはたかれた。咄嗟に攻勢に出たが、

「やかましい！ 何が女の子だ。変な妄想もいい加減にしろ。それと、あんたの妄想に俺を巻き込むな。何が一緒にベッドインだ。高熱が出て頭に気味の悪い虫でも湧いたか？」

最後の一言は余計だったとして、彼の言うことのほうが百倍正しかった。しかし、私だって本気でそんなことを考えていたわけではないし、彼のほうが正しかったからと言って、このまま黙っていたら、私はただの変態である。なので、

「わ、私だって本気でそんなこと思っていたわけじゃないですよ！ただ、そんな感じがすると、あくまで感覚を言葉で表現しただけだから、私は落ち着かないって……」

私は本気で釈明した。ただ、ほとんど本当の話だったのだが、ところどころ曖昧な表現を使っていたので、言っていて説得力がないと感じていた。しかし、彼は理解してくれたようで、

「まあ、それは置いておいて。とりあえず元気になったようだな」と、話題を変えてきた。

「はい。おかげ様で」

私は素直に感謝の気持ちを伝えたのだが、返って来たのはまたしても頭に平手打ちだった。

「な、何ですか！もう変なこと考えていませんよ！私はお礼を言うだけで」

訳が解らなかった私は、彼に抗議したのだが、

「このバカ野郎」

私は本当に何も解っていなかったようだ。

「何考えてやがる。学校を休むほどの高熱出したやつが、雨の外をうろうろするな」

「……………」

私は何も言うことができなかった。彼の言うことがあまりに的確すぎて。自分があまりに愚か過ぎて。

「しかも雨の中、一時間もあんなところで寝てやがって、肺炎にでもなったらどうするんだ。今でも肺炎は怖い病気なんだぞ」

「すみません……」

目頭が熱くなる。彼の怒りがあまりに怖かったからではない。とにかく涙ができてきた。泣いてしまうと彼を困らせてしまう。そんなことは百も承知だった。しかし止まらなかった。彼は優しい人だ。困っている人、悲しんでいる人を見かけると、放っておけないくらい優しい人だ。そんな彼が、ここまで怒ってくれている。それは間違いなく私に対する優しさだった。

「たかが風邪だって見てくびっていると、痛い目見るぞ。今日は俺がたまたま早く帰ってきたからよかったものの、麻生あたりとどっかうろうろしていたら三十九度じゃすまなかったかもしれないんだぞ」
「……………」

私は沈黙の変わりに感謝を述べたかった。しかし声は出なかった。代わりに出てきた涙はとどまることを知らなかった。そんな私を見て、彼は呆れてしまったように、一度小さくため息をつく、いつもの落ち着いた声に戻って、私に向かって、タオルと携帯電話を放り投げてきた。

「とにかく、こんな無茶は二度としないでくれ。俺に迷惑をかけたくないんだったらな」

「はい、すみません……」

とにかく何も言えなかった。謝るしかできなかった。でも、悪いと思った反面、素直に嬉しかった。不謹慎かもしれないし、彼には絶対に言えないが、私を心配してくれて怒ってくれた彼の優しさに、心が熱くなった。しかし、直後急激に熱が下がるようなことを言った。いつも私に構ってくれず、声をかけるのはいつも私からだった。正直私に興味ないので、と疑問に思ったことは数知れない。しかし、今日のことでは、私に対する気持ちが少し伝わってきた。もしかしたら彼が私に対して積極的に行った初めての行動だったかもしれない。

小さな喜びに浸っていると、彼はそれを妨害するようなセリフを口にした。

「真嶋に連絡入れてやれ。そういえばお見舞いに行くとか言っていたから、かなり心配しているだろう」

もう八時を過ぎている。まさかとは思うが、まだ寮の前で彼女が待っていたらどうしよう。きっと心配しているだろう。加えて、私も彼女が心配である。なぜ今言ったのだ。正直遅すぎると思う。

「そ、それを先に言って下さい……」

怒られた直後とは言え、さすがに悪態をつかざるを得なかった。

Part. 4 side - N

「電話ありがとうございました」

そう言って電話を俺に手渡してきたときには、もうすっかり泣き止んでいた。

「成瀬さんの言ったとおり、真嶋さんは寮に行っていたみたいです。とても心配かけてしまいました」

涙は止まっていたが、どうやら落ち込んでいるようだ。周りに迷惑をかけている。そこがこいつにとって一番悔やまれるところらしい。自分もかなり苦しかったはずだが、そいつに関してはどう思っているのか、口にはしなかった。

こうしてただ落ち込んでいる様子を眺めている限り、普通の女子に見えなくもない。しかし岩崎が岩崎たる由縁は、普通の女子ではないところだ。

「これ以上心配をかけないためにも、絶対に今日で治してしまわないといけないですね」

気持ちを切り替え、すぐに前を向いた。いつまでも落ち込んでいない。テンションの上下が激しいのは、いつものことである。

もちろんこの案を否定するつもりなどない俺は、気を遣って、

「じゃあ、もう寝るか？」

と聞いた。絶対今日中に治そうと意気込んでいるのだ。早めに寝ることに越したことはないだろう。しかし、返ってきた答えは、

「あ、いえ……」

だった。はて、どういうことだろうか。俺が岩崎の答えに首をかしげていると、

「あの、ちょっとお話したいなあ、なんて思ったりなんかしたりして……」

などと言い、苦笑気味に笑った。笑って誤魔化すなよ。

まあいい。実際まだ九時前である。さすがに寝るには早すぎる気がしないでもない。適当に付き合ってやろう。夜中三時くらいに起こされるくらいなら今付き合うほうが、いささか気も楽である。

俺は上げかけた腰を再びベッドの隣に下ろす。

「それで、一体どんな面白い話を聞かせてくれるんだ？」

「え？面白い話、ですか？」

「俺を止めてまで言うんだ、飛び切り面白い話でも披露してくれるんだろ？」

俺は冗談半分で言ったのだが、岩崎はというと、

「あ、いえ、別にそういうつもりで言ったわけではないんですけど……」

と困り果ててしまっていた。まあ面白い話があるならそれでもいい

のだが、

「むむむむ。面白い話ですかあ、そうですねえ……」

と呟いている岩崎を見ると、おそらく出てこないだろうと思う。そこで、

「どうだ、久しぶりに学校サボった気分は。去年の九月以来か？」

しばらく黙って見守っていたら、岩崎としゃべらず、もしかしたらそのまま岩崎は眠ってしまったかもしれない。そうしたほうがよかったのかもしれないし、現在面倒だという気もないではない。しかしそうしなかったのは、おそらく……。言わないでおこう。というか言いたくない。何となく気が付いている自分がいるのだが、認めたくない自分もいる。しいて言うのなら、恥ずかしい。

「えっと、確かそうですね。あれは、笹倉さんの事件のときですか。あれからもう九ヶ月近く経つんですね。早いものです」

あのときは完全にサボりだった。ちなみに岩崎だけでなく、俺も麻生も学校をサボった。まあいろいろやるがあったのだ。それぞれ内容は違ったわけだったのだが、それはまた別の話である。

「あの事件がTCCのきっかけになったんでしたよねえ……」

岩崎は思い出すように、ぼそっと呟いた。確かにそうだ。まあ、岩崎が勝手に作ったただけだが。今となってはそれが当たり前になっているのだから、静かな日常に懐かしさを感じるのも頷ける。

「……………」

思い出すのは、最後に笑う笹倉の顔だ。結局俺たちがしたことが正しかったと思えたのはあの笑顔があったからだ。それがなければきっと今も心のどこかで罪悪感を抱えて暮らしていたと思う。実際はどうか解らないのだが、あいつが笑ってくれたからこうしてTCCなど立ち上げて暢気に暮らしているのだ。

「あの、成瀬さん？」

一人昔話に旅立っていた俺を現在に呼び戻したのは、不安そうな岩崎の声だった。

「何だ？」

「成瀬さんはこの半年どうでしたか？楽しかったですか？」

何だ、藪から棒に。まだ五月の後半だ。一年を振り返る季節じゃないぞ。

「唐突だな。先にあんたのほうから聞こうか？あんたはどうだったんだ？」

「私はとても楽しかったです。今まで送ったことないような、とても充実した毎日を送ってきました」

岩崎は静かに話し始めた。躊躇いもせず落ち着いて言葉を紡ぐその姿は、いつもと違う様子だった。

「私はTCCを作って本当によかったと思います。きっかけである笹倉さんの事件はとても悲しいものでしたし、きっかけが事件というのはやはり悲しいのですが、それでも私はTCCを創ってよかったと思っています。そのときは思い付きでしたが、我ながらいい思

い付きだったと思います」

やはり思い付きだったのか。解決したときの、相手からの感謝が心地よくて、と言う理由で始めたTCC設立だったが、理由からして思いつきそのものである。ビギナーズラックというやつだ。案の定、設立直後から壁にぶち当たった。

「これまで半年、請け負った事件のために奮闘した時間より、部屋でまったりしていた時間のほうが長いかもしれませんが、私は充実していました」

話す岩崎はとても真剣だった。何だが、突っ込むのも忘れてしまっている。俺としたことが。まあ、こんなときくらい真面目に話を聞いてやらないと、俺はこれからこいつの話を真面目に聞く機会がなくなってしまう。

「成瀬さんは、存在意義のない団体、と言うかもしれませんが、私はそうは思いません。実際事件の解決を請け負っているときは、間違いなく存在意義があることに異議はないと思いますが、請け負っていないときも私にとってはとても重要な団体です」

そりゃあんたが作った団体だからな。これであんたも必要としていなかったら何のために作ったのか、誰一人として解らなくなってしまう。

「つまり、あんたは他人のためのと掲げているにもかかわらず、自分のためにこの団体を創設した、ってわけか？」

岩崎は俺の言葉に、一瞬考えるような顔をしたが、

「そうですね、TCCは私のために存在しているんです、きっと」

そう言って苦笑した。その表情は、病人に対してこういうのはあっているのか解らないが、とても生き生きしていた。あまりに病人らしからぬその表情に、

「なるほど」

俺もつられて笑ってしまった。

「私って結構自分勝手だったんですね。ショックです」

「俺は結構前から知っていたけどな」

「成瀬さんに言われたくありません！」

そう言って声を荒らげたのは一瞬だった。

「それで、こうしてTCCを創設して、毎日充実した生活を送れているのですが、」

それまでテンポよく言葉を紡いでいた岩崎が、躊躇うようなしぐさを見せ

「それで、そのう……成瀬さんはどうですか？」

何となく岩崎の考えていることが解った。どうやらこいつは心配しているようだ。

「確かに面倒なことが多かったな。俺もそれなりに苦労した」

思いつきと勢いで俺を巻き込み、面倒ごとを背負わせたのではな

いか。そう考えているのだろう。病気になる、人は弱気になる。普段考えないようなことを考えてしまっているのだろう。

「面倒ごとが嫌いな俺にとっては、自ら面倒ごとを呼ぶようなこの団体は悪夢のような団体だ。赤の他人のために自分が苦勞するなんて、俺はごめんだぜ」

「そう……ですか。そうですね、成瀬さんは面倒臭がり屋ですもんね、成瀬さんにこの団体は似合わないかもしれませんね」

岩崎は皮肉めいた口調でそんなことを言いやがる。だが、そんな今にも泣き出しそうな表情で言われたって、少しも頭に来ないぜ。皮肉を言うときはもっと皮肉を言うにふさわしい表情ってもんがあるだろう。それと、話は最後まで聞くもんだ。早とちりして先走るのもあんたの悪い癖だ。

「だが、」

「え？」

正直あまり言いたいことではないが、こいつがこんな表情をしているのだから仕方がない。病人相手に、今にも泣き出しそうな表情をされて黙ってみていられるほど、俺の心は強く出てこない。

「TCCがあんたのために作られた団体なら仕方がない。あんたの尻拭いをするのが、どうやら俺の仕事らしい」

俺の言葉を聞いた岩崎は、口を開けたまま固まってしまった。正直、何か言ってもらいたかったのだが、こいつは本当に俺の思惑通りに動いてくれない。黙っていてほしいときにはうんざりするくらい話しかけてくるくせに、何か言っしてほしいときには黙りやがる。

「それにもう慣れちゃったよ。あんたのわがままには。TCCはあんたのわがままの象徴だ。それなら俺が巻き込まれるのは道理ってもんだ」

俺がそこまで言うと、岩崎はようやく口を開く。

「生意気言わないで下さい」

岩崎はため息混じりに微笑んだ。出来の悪い弟を見るような目をするのは止めろ。生意気言っているのはどっちだよ。まあここで謝られたら、俺は本気で岩崎の病状を心配するだろうけど。

「でも、よかったです。やっぱり本当に嫌がっているのなら、強要するのはよくないですからね。ちょっと安心しました。あれは嫌がっている演技だったんですね」

演技でも何でも無い。本当に嫌なんだよ。岩崎は成功したときの快感を考えて事件に向かっていているらしいのだが、俺はどうしても失敗したときのことを考えてしまう。実際うまく解決できても、そんな快感に浸る暇などない。うまくいってよかった、という安堵感でいっぱいだ。俺はぎりぎりのスリルってやつが好きじゃないんだ。絶叫マシーンも嫌いだ。

「クビにしたいなら好きにしてくれ」

「そんな強がり言わなくてもいいですよ。何と言っても成瀬さんの唯一の居場所ですからね、私も理解しているつもりです」

ついさっきまで泣きそうだったのに、もうすでに口は絶好調になってしまっている。やれやれだ。解ってはいいたが、こいつに気を遣

う必要などなかったようだ。ちょっと優しくしたらすぐこれだ。これだからテンションの上下が激しいやつは困る。

「言いたいことはそれだけか？ ないならもう寝ろ」

今となっては微妙だが、一応熱があって体調を崩していたのだ。いつものような勢いでしゃべり続けては治るものも治らない。

そう思い、俺は部屋を出ようと立ち上がったのだが、

「あ、ちょっと待って下さい！ まだあります、えーっとそうですね……」

服のすそをつかまれて、強制的にもう一度座らされた。

「何慌てているんですか？ 本当のことを言われたからといって怒らないで下さい」

慌てているのはあんだだ。服を引っ張るな。伸びるだろう。

「とりあえず手を離せ」

「嫌です」

「何で？」

「どっか行っちゃうからです」

俺の家だぞ。どこにしようとか俺の勝手だ。それに明日までに絶対治すと言っていたのはあんだだろ。さっさと寝ろよ。俺の心遣いを無駄にしやがって。

「どこも行かないから離せ」

「本当ですか？」

「ああ」

「じゃあ離します」

すでにベッドの横に座っているのだが、なかなか信用してくれなかった岩崎は、ようやく服を離す。何なんだこのやり取りは。小さい子供の相手でもしているような錯覚に陥りそうだ。

「あんた、本当に病人か？」

「見て解りませんか？こんなにくだるそうな顔をしているのに。だから成瀬さんは鈍感だと言われるのです」

あんた以外に鈍感だと言われたことはない。それにしてもこいつ、

「今日はやけに突っかかってくるな。いつも以上に情緒不安定だし」

さっきから泣いたり怒ったり、上下が激しすぎる。いつもはここまでわがままじゃないぞ。俺が学校から帰ってきたときは本当に調子悪そうだったが、今じゃうるさいくらいだ。

「成瀬さんが鈍感すぎるからです！」

だから叫ぶな。近所迷惑だ。あと、熱がぶり返すぞ。

「俺が鈍感なのはいつものことなんじゃないのか？」

「いつも以上に鈍感です。今日はいつもの三倍鈍感です」

三倍とか言われてもピンと来ないんだが。まあ具体的な数値を言われてもピンと来ないんだろうけど。

「鈍感鈍感とばかり言っていないで、はっきり言ったらどうなんだ？
これじゃあいつまで経っても理解できないぞ」

「私ははっきり言いました！」

岩崎は叫んだ直後に顔をうつむかせた。何か言っていたっけ？

「何て言った？」

「で、ですから……」

うつむかせた顔をますますうつむかせる岩崎。よほど言いにくい
ことらしいな。

「成瀬さん、本当に解らないんですか？意地悪しないで下さい……」

ここまで言われると聞きにくいな。少し自分で考えてみよう。お
そらく今日言ったことだろう。何かあったかな。まさか例の妄想め
いた話じゃないだろうな。もしあれだとしたら、俺は一目散にこの
部屋から逃げるね。貞操の危機だ。体裁なんていってられない。
まああれではないだろう。すると何だ？そんなに重要な会話なんて
あったかね。

「……………」

「……………」

考えた末に出た結論は、

「本当に解らん」

仕方がない。思い当たらないのだからな。まあ別に無理矢理聞こ
うとは思わない。岩崎が言いたくないのなら、俺はそれでいい。

「……………」

しかし岩崎は、しばらく黙ってうつむいていた末に、不意に顔を上げ、

「わ、私は、一緒にここにいてほしいって言いました！成瀬さんとお話がしたいってはっきり言いました！」

「……………」

そういえば言っていたな。はっきりと言っていたし、俺もはっきりと聞いていた。ただ、そんなに重要なことだと思っていたいなかっただけだ。熱が出て少し気持ちが弱くなっている。そういう風に解釈していた。それで合っているよな？

「なのに成瀬さんは、話を切り上げてさっさとここから出て行こうと……。もし意地悪なら性質が悪すぎます……………」

「いや、俺はただあんたが寝やすいように……………」

口ごもってしまったのは、無意識的に俺が悪いと理解しているからだろうか。

「私は寝たいなんて一言も言ってません」

岩崎は強気な口調で言う。その顔は怒りながら泣きそうである。テンションの上下が激しすぎて、とうとうこんな技まで習得してしまったのか。器用なやつだ。それにしても、

「……………」

こいつに関しては俺が悪いような気がする。寝やすいようにって
いうのはただの言い訳なのかもしれない。

「……………」

黙って俺をにらみつけてくる岩崎の目尻にはうつすらと涙が浮か
んできている。顔が真っ赤なのは熱のせいだけじゃないだろう。

「悪かったな。あんたの言うとおり、俺は度を越えた鈍感らしい。
謝るよ」

「もういいです。慣れましたから。許します」

岩崎はそんなことを言って、寛大にも許してくれた。お優しいこ
つて。

「ですが、それは成瀬さんの愚考に関してだけです」

愚考って……。

「これから一晩中お話聞いてもらいますよ。愚痴も聞いてもらいま
す」

やれやれ。本当に治す気あるのかよ。さっきまで熱にうなされて
いたやつ言うことじゃないな。相変わらずタフなやつだ。回復が
早いのも岩崎の岩崎たる由縁なのかもしれない。観念した俺は、長
期戦の構えに入るため、再び立ち上がる。

「ちょっと！言ったそばからいなくなろうとしないで下さい！」

すると再び服のすそを掴まれ、阻止された。

「長くなりそうだからな、水を取ってくる」

「水なんてなくていいです」

俺は思わず苦笑した。一体何を心配しているんだよ。

「俺が欲しいんだよ。あとトイレにも行きたい。今夜は長そうだからな」

「……どっか行かないですよね？」

「どっかってどこだよ？」

「どっかはどっかです！行かないですよね？」

「どこも行かない」

「すぐ戻ってきて下さいよ？」

「解っている」

「じゃあ、行って来ていいです」

そこでようやく解放され、俺は言われたとおりに急いで行動して、すぐに戻ってきた。

「言葉を曖昧にして結論を誤魔化しているわけでもないのに、察してくれないなんて鈍感すぎます。鈍感なんて言葉では括れません。成瀬さん専用に新たに言葉を作らないと私の気持ちじゃ済みません。そうかと思えば、事件になると妙に鋭くなって、他の誰も気が付かないようなことに気が付いて、事件解決の立役者になるから性質が悪いです。きっと事件に必ずかわいい女の子が関わっているのが理由だと思っんですよ。まあ、本人は絶対否定すると思いますが、私には解るんです。間違いありません。って成瀬さん聞いているんですか？成瀬さんはそうやって自分から眼を背けるからいけないので

す。そもそも……」

といった感じで、さっそく岩崎のトークショーが開始された。内容は九割がた俺に対する愚痴だった。愚痴を聞いているほうは少なからずぐったりするものだが、自分に対する愚痴を聞いている俺の疲労度は天上知らずだ。俺に愚痴ってどうするんだ。俺本人に言っている時点でそれはもう愚痴ではなく、クレームだ。それを言われている俺は一体どんな反応をすればいいのだ。実際俺は適当に謝っているだけだったのだが。

永遠に紡がれると思った岩崎の愚痴だったが、やはり体調不良だったのだろう。意外にも早く終焉を迎えた。

「……………」

適当に聞き流していたら、不意に声が聞こえなくなった。見ると眠っていた。正直しんどかったね。おかげで今の俺のHPはほとんど残っていない。しかし、と俺は思った。

岩崎の寝顔はとても穏やかで、とてもすっきりした様子だった。それもそうだ。あれだけ好き勝手しゃべったんだ。これで釈然としない様子で眠られたら、俺はこいつをたたき起こして、今度は俺の愚痴を聞いてもらう。

まあ俺の愚痴は俺が病気になったときにでも聞いてもらうとして、俺は静かに立ち上がると部屋の電気を消し、寝室から退散した。俺も疲労困憊だ。とてもよく眠れそうである。岩崎のおかげと言っているのかね。

俺はリビングに行くときすぐさまソファーに横になり、三分も立た

ないうちに眠りに付いた。

その四 side I

「電話ありがとうございます」

頑張って涙を止め、涙声にならないようにしたのだが、それ以上に苦労したのが、使った電話がなぜ成瀬さんの電話だったのかというところの、嘘をでっち上げる作業だった。ちなみに、外でばったり会ったという、何とも嘘っぽい嘘だったのだが、真嶋さんはちゃんと信じてくれた。こういうところに彼女の育ちのよさを感じた。信じてもらえてよかったのだが、騙してしまったという罪悪感が残った。しかし、

「成瀬さんの言ったとおり、真嶋さんは寮に行っていたみたいです。とても心配かけてしまいました」

それ以上に心に突き刺さったのが、予想以上に心配して下さったことだった。もしかしたら、私の嘘を信じてくれたのも、それ以上に心配して下さったからなのかもしれない。お見舞いをしてくれるなんて、これっぽっちも考えていなかった私は、軽率で自分勝手な行動に出てしまった。彼にはもちろん、真嶋さんにも予想以上の迷惑をかけてしまった。後悔ばかりが残る一日になってしまった。しかし、落ち込んでばかりもいられない。明日もまた学校はあるのだ。

「これ以上心配をかけないためにも、絶対に今日で治してしまわないといけないですね」

彼も、私の考えに賛成してくれたようで、無言で深く頷いてくれた。しかし、

「じゃあ、もう寝るか？」

と言われると、少しもったいないような、寂しいような気がしてくる。思わず、

「あ、いえ……」

などと抽象的ながらも、否定の言葉を口にしてしまった。もちろん彼は、疑問符を浮かべて首をかしげる。こういうことに鈍感な彼のことだ。はっきりと言わなければ、きっと理解してもらえないだろう。事件になると本当に鋭い感性を披露するくせに、もっとこっち方面でも勘を鋭くしてもらいたい。しかし、出てきた言葉は、

「あの、ちょっとお話したいなあ、なんて思ったりなんかしたりして……」

などという実に弱々しいものだった。我ながら情けない。いつもは強気に言葉を並べ、彼を罵倒しているくせに、自信のないことに関してはどうしても強く出られなかった。曖昧な言葉に、自分でも苦笑いしてしまった。これでは何も伝わらないだろうと思っていたのだが、予想に反して、彼は腰を下ろしてくれた。おそらく夜中に起こされるくらいなら、今付き合ったほうがまだ、なんてことを考えているのだろう。まあ、私としては結果オーライだ。

「それで、一体どんな面白い話を聞かせてくれるんだ？」

と思ったら、話はずいぶん方向に飛んでしまった。

「え？面白い話、ですか？」

思わず聞き返してしまう。今の話でなぜ面白い話をしなくてはいけないかってしまうのだろうか。すると、彼は、

「俺を止めてまで言うんだ、飛び切り面白い話でも披露してくれるんだろ？」

なるほど。そういう解釈をされてしまったのか。

「あ、いえ、別にそういうつもりで言ったわけではないんですけど……」

私としては、本当に他愛もない話をしたただけなのだが、彼はそうでもないみたいだ。そんなにネタを持っているわけではないし、面白い話などできる自信もなかったのだが、彼が面白い話を期待しているなら、何とかしなければ。

「むむむむう。面白い話ですかあ、そうですねえ……」

考えたのだが、やはり出てこない。黙って考えていると、そのまま彼は寝てしまうような気がした。私はとても焦ったのだが、焦っても出てこないものは出てこない。こういうときに面白い話がパツと出てこない自分に腹が立った。すると、

「どうだ、久しぶりに学校サボった気分は。去年の九月以来か？」

彼が助け舟を出してくれた。しかも、それは私が望んでいた普通の話。これは私の妄想かもしれないが、もしかしたら彼も普通の話がしたくなったのではないか。あくまで私の妄想なのだが。

「えっと、確かそうですね。あれは、笹倉さんの事件のときですか。あれからもう九ヶ月近く経つんですね。早いものです」

正確に言うと今日はサボったわけではなかったのだが、あのときは完全にずる休みだった。彼も一緒にサボったのだ。若干の罪悪感はあるが、後悔はしていなかった。密かに皆勤賞を狙っていた私だったが、あれは必要なサボりだったと、今でも思っている。そして、

「あの事件がTCCのきっかけになったんでしたよねえ……」

私はあのとき笹倉さんの感謝の言葉が心に響いた。自己満足と言われても仕方のないくらい、情けない理由だけど、それから今までいくつか事件を解決してきたのだ。完全に無駄だったとは思わない。当時を思い出し、黙り込んでしまった私だったが、

「……………」

彼も同じように黙り込んでいた。おそらく私同様、当時を思い出しているのだろう。そして、それから今までのことを考えているのだと思う。彼はどう思っているのだろうか。一度そんなことを思うと、いても立ってもいられなくなってしまった。

「あの、成瀬さん？」

「何だ？」

声が震えそうになるのを押さえ、搾り出すように出した私の声に、彼が反応する。そして、私は決定的な一言を口にした。

「成瀬さんはこの半年どうでしたか？楽しかったですか？」

不安で押しつぶされそうだった。声は震えていなかったかもしれないが、手は震えていた。おそらく表情はとても硬いだろう。それは自分でも解った。

「唐突だな。先にあんたのほうから聞こうか？ あんたはどうだったんだ？」

「私はとても楽しかったです。今まで送ったことないような、とても充実した毎日を送ってきました」

即座に答えることができる。心から楽しかった、と。

「私はTCCを作って本当によかったと思います。きっかけである笹倉さんの事件はとても悲しいものでしたし、きっかけが事件というのはやはり悲しいのですが、それでも私はTCCを創ってよかったと思っています。そのときは思い付きでしたが、我ながらいい思い付きだったと思います」

やはり思い付きだったんじゃないか、と責められてしまうかもしれないが、今は自分の本心を口にしたかった。いつもなら怒られてしまうかもしれない様な言葉だったが、今なら真剣に聞いてもらえるような気がした。今なら本音が聞けるような気がした。

「これまで半年、請け負った事件のために奮闘した時間より、部屋でまったりしていた時間のほうが長いかもしれませんが、私は充実してました」

かつて、これほど真剣に私の言葉を聞いてくれたことがあっただろうか。いや、いつも彼は真剣に聞いてくれていたのだ。はぐらかしていたのは私のほう。彼は普段は自由奔放な人だ。集団行動が似

合わない人だ。しかし、彼は自分を押さえつけて、相手を尊重してくれる人でもある。私が真剣に話せば、真剣に聞いてくれるのだ。知っていた。ただ、彼の真剣な言葉から逃げていたのだ。

「成瀬さんは、存在意義のない団体、と言うかもしれませんが、私はそうは思いません。実際事件の解決を請け負っているときは、間違いなく存在意義があることに異議はないと思いますが、請け負っていないときも私にとってはとても重要な団体です」

そこは私の居場所だった。幸運ながら家族には恵まれていた。友人にも恵まれていた。委員会やクラスでも、私は排斥されることはなかった。しかし、TCCという場所は、他のどの場所より居心地がよかった。それは間違いなかった。

「つまり、あんたは他人のためのと掲げているにもかかわらず、自分のためにこの団体を創設した、ってわけか？」

彼の言葉を聞き、考え込む。言われてみればそうかもしれない。相談者のために動いていないときも、私には存在意義がある。つまりは私自身が一番TCCを必要としていたということではないか。

「そうですね、TCCは私のために存在しているんです、きっと」

言われて初めて気付いた。彼のことを鈍感と言えないかもしれない。思わず苦笑いをしてしまう。

「なるほど」

納得の言葉を口にした彼も、つられたように笑ってくれた。その笑顔を見て、また私も笑う。

「私って結構自分勝手だったんですね。ショックです」

「俺は結構前から知っていたけどな」

「成瀬さんに言われたくありません!」

心外なことを言われて、思わずカッとなってしまったが、声を荒らげた次の瞬間、一気に熱が冷めた。TCCは私のために存在している。だから私は充実した毎日を送れている。それはさつき確認したことだ。しかし、他の人はどうなのだろうか。

私は生唾を飲み込んだ。ここまで来たのだ。その勢いで聞いてしまおう。そうでなければ、ここまで本音を言った意味がない。ここからが本当に聞きたいことだった。

「それで、こうしてTCCを創設して、毎日充実した生活を送れているのですが、」

彼はどう思っているのだろうか。このTCCを中心に回る高校生活について。

「それで、そのう……成瀬さんはどうですか?」

ついに、決定的な一言を口に出してしまった。もう引き返せない。出した言葉を飲み込むことは出来ない。私は目を閉じた。聞きたいような聞きたくないような。怖いというのが本音だ。しかし、これを聞かないと、前に進めないような気がした。

私は自分の思いつきで、彼を振り回してしまっているのではないか。彼の生活を狭めてしまっているのではないか。彼の高校生活をつまらなくしてしまっているのではないか。

そして、

「確かに面倒なことが多かったな。俺もそれなりに苦労した」

彼は静かに口を開いた。

「面倒ごとが嫌いな俺にとっては、自ら面倒ごとを呼ぶようなこの団体は悪夢のような団体だ。赤の他人のために自分が苦労するなんて、俺はごめんだぜ」

私のよくないほうの予想が的中してしまった。ショックかと聞かれれば、もちろんそうだが、信じられないかと言われれば、答えは否だ。むしろ、やっぱりそうか、と納得できる。彼はそういう人だ。自分自身でもよく口になっている。

「そう……ですか。そうですね、成瀬さんは面倒臭がり屋ですもんね、成瀬さんにこの団体は似合わないかもしれませんね」

聞きたくなかった。しかし、これは現実だ。受け入れなければいけない。これ以上私のわがままに付き合わせるわけにはいかない。私はこの半年、ずいぶん楽しい思いをさせてもらった。十分すぎるほどの思い出が出来た。またしても目頭が熱くなる。泣いたらだめだ。ここで泣いてしまったら、彼に迷惑がかかる。笑って何か言うんだ。そうすれば、笑い話に出来る。しかし、そんなことできる訳がなかった。出来れば、否定して欲しかった。すると、

「だが、」

「え？」

彼は逆説を使った。それは、私の幻聴ではない。なぜなら、彼は続けてこんなことを言ったからだ。

「TCCがあんたのために作られた団体なら仕方がない。あんたの尻拭いをするのが、どうやら俺の仕事らしい」

理解できなかった。コンピューターがよくやるように、私はフリーズしてしまった。読み込んだ情報が処理できなかった。そして、頭に熱が回ってくる。人間もコンピューターも、脳みその構造はあまり変わらないんだな、なんて全く関係ないところで冷静さを保っていた。続けて彼は言う。

「それにもう慣れちゃったよ。あんたのわがままには。TCCはあんたのわがままの象徴だ。それなら俺が巻き込まれるのは道理ってもんだ」

まだ理解できない。だが、何となく解った。彼はまだ私のわがままに付き合ってくれと言っているのだ。そこまで理解できたとき、私は、子供のわがままを温かく見守る親が脳裏に浮かんた。つまり、私がわがままを言うのは世の常であり、彼がそれを受け入れるのは、道理だということなのだろう。

「生意気言わないで下さい」

安心して思わず笑みがこぼれた。加えて、思わず悪態をついてしまった。やはり私はわがまま娘なのかもしれない。しかし、表立って認めるわけにはいかないので、嬉しい気持ちを抑え、さらに嫌味を言うことにする。

「でも、よかったです。やっぱり本当に嫌がっているのなら、強要

するのはよくないですからね。ちょっと安心しました。あれは嫌がっている演技だったんですね」

「クビにしたいなら好きにしてくれ」

そんなことする訳がない。私の居場所は、彼の隣なのだ。私が彼をクビにして、いいことなど一つもない。もちろん、そんなこと言える訳がないので、

「そんな強がり言わなくてもいいですよ。何と言っても成瀬さんの唯一の居場所ですからね、私も理解しているつもりです」

と言っておく。

すると彼は、めんどくさそうにため息をついた。彼は本当にため息が似合う。これは褒め言葉なのか解らないので、本人には言わないが、私はその仕草が気に入っていた。今日は特別多くその仕草が見れているので、先ほどの言葉とともに、私の心を幸せにしていた。しかし、不幸は突然訪れた。

「言いたいことはそれだけか？ ないならもう寝ろ」

いきなりそんなことを言う彼。そして、私の返事を待たずに立ち上がろうとする。もちろん私は慌てた。

「あ、ちょっと待って下さい！ まだあります、えーっとそうですねえ……」

何とか服のすそを掴むことに成功し、強制的に座らせる。

「何慌てているんですか？ 本当のことを言われたからといって怒ら

ないで下さい」

どうでもいいことをまくし立て、何とか時間を稼ぐ。こんな姿を見ていると、自分のことながら、やはりわがまま娘そのものだなと思ってしまう。しかし、心のどこかで、私は病人なのだから甘えて当然だ。などという自分勝手極まりない意見が発生していた。

「とりあえず手を離せ」

「嫌です」

なぜだか私は急に強気になっていた。そして、

「何で？」

「どっか行っちゃうからです」

恥ずかしげもなく、恥ずかしい本音を口にしていた。彼は当然理解できなかったようで、眉をしかめる。

「どこも行かないから離せ」

「本当ですか？」

「ああ」

「じゃあ離します」

一体どこの子供だろうか。わがまますぎる自分の行動に対して、冷静に駄目だしを入れる自分がいた。しかし、今私の中にはいわゆる冷静で大人な天使と、わがままで子供名悪魔が同時に存在していた。加えて、今は悪魔のほうが圧倒的に立場が強く、表面上の私に影響を与えていたのは、完全に悪魔のほうだった。

「あんた、本当に病人か？」

「見て解りませんか？こんなにけだるそうな顔をしているのに。だから成瀬さんは鈍感だと言われるのです」

おそらく彼のことを鈍感だというのは、ある程度付き合いの長い、もしくは深く付き合っている人だけだろう。なぜなら彼はある一定の事柄に関してだけ、鈍感になるのだから。

「今日はやけに突っかかってくるな。いつも以上に情緒不安定だし」

私がここまでいつもと違うのに、彼はいつも以上に冷静だった。またしても自分勝手極まりないことなのだが、私だけ醜態をさらしているのは、納得がいかに思わず叫んでしまう。

「成瀬さんが鈍感すぎるからです！」

彼はまたしてもため息をつく。おそらく近所迷惑になるだろう、などと考えているに違いない。

「俺が鈍感なのはいつものことなんじゃないのか？」

口にするセリフも、いつもと同じように冷静で的を射た発言だった。

「いつも以上に鈍感です。今日はいつもの三倍鈍感です」

だからいつも以上に私は腹が立った。今日くらい私の気持ちに氣付いてくれないのではないかと。

「鈍感鈍感とばかり言ってないで、はっきり言ったらどうなんだ？これじゃあいつまで経っても理解できないぞ」

「私ははっきり言いました！」

「何て言った？」

「で、ですから……」

また言わなければいけないのだろうか。先ほどの曖昧で、正直な苦しいたいのかわからないような発言でも、私は恥ずかしさから沸騰しそうだったというのに。実際この人は本気なのだろうか。

「成瀬さん、本当に解らないんですか？意地悪しないで下さい……」

私の言葉に、彼は黙り込んだ。どうやら先ほどまでの会話を思い出して、考えているようだ。今日は恥ずかしい発言ばかりしているので、あまり思い出して欲しくない。しかし、簡単に忘れられても、やはり困る。先ほどから、私は矛盾する発言ばかりしているな。こういうことを考えると、つくづく思う。人の想いは、葛藤から生まれるのだと。

「……………」

待つこと、五分ほど。永遠かと思われるほど長かったが、果たしてその結果は？

「本当に解らん」

だろうと思った。彼が解るわけないのだ。私がどれほど勇気を出して、あの言葉を口にしたか、解る訳が無い。それはしょうがないことなのだ。しかし、納得できない。なぜ、彼は悪びれないのだろうか。むしろ胸を張っているように見える。納得いかない。なぜ、私だけこれほど恥ずかしい思いをしなければならないのだろうか。

「……………」

あまりの恥ずかしさに、私はうつむいてしまった。しかし、言わなければ先に進まない。現在の会話的にも、私と彼の状況的にも、意を決して、顔を上げ、

「わ、私は、一緒にここにいてほしいって言いました！成瀬さんとお話がしたいってはっきり言いました！」

言ってやりました。

「……………」

少し表情が変わったことを、私は見逃さなかった。どうやら思い当たる節があったようだ。当たり前だ。私は間違いなく言ったのだから。

「なのに成瀬さんは、話を切り上げてさっさとここから出て行こうと……。もし意地悪なら性質が悪すぎます……」

「いや、俺はただあんたが寝やすいように……」

珍しく彼が言葉を濁し、はっきりと言い切らなかった。おそらく自分が悪いと気付いてくれたのだろう。しかし、私は攻撃の手を緩めなかった。

「私は寝たいなんて一言も言ってません」

「……………」

黙り込む彼。この沈黙が嫌だった。私はまたしても目頭が熱くなってしまう。なぜだか解らない。おそらく恥ずかしさと、自分の

ことを理解してくれない悔しさからだろう。

「……………」

とうとう目尻にうつすらと涙がにじんできてしまった。頬がとても熱い。熱のせいじゃない。恥ずかしさと悔しさからだ。

しばらく睨みつけていると、彼が観念したようにため息をついた。

「悪かったな。あんたの言うとおり、俺は度を越えた鈍感らしい。謝るよ」

こういうところはとても大人だ。滅多に悪びれない彼だが、自分が悪いと思った瞬間、あっさり謝る。そこが彼のすごいところであり、ずるいところでもある。

「もういいです。慣れましたから。許します」

こうも素直に謝れると、私は許さざるを得ない。まだ言い足りないこともあるのだが、ここで許さなければ、今度は私が悪役になってしまう。ここは大人しく退くことにしよう。

「ですが、それは成瀬さんの思考に関してだけです」

なので、違うことに関して、文句を言うことにする。

「これから一晩中お話聞いてもらいますよ。愚痴も聞いてもらいます」

我ながら素晴らしい機転だと思った。これには反論できないだろ

う。そんなことを考えていると、彼がいきなり立ち上がろうとした。私は焦った。

「ちょっと！言ったそばからいなくなろうとしないで下さい！」

これはずるい。こんな攻勢に出られたら、私はいったいどうすればいいのだろうか。私が動けないからと言って、こんな卑劣な手段を使おうなんて、いくら何でも鬼畜すぎる。病人相手に使う手段ではない。

焦りまくっている私を見て、またしても彼はため息。そして、

「長くなりそうだからな、水を取ってくる」

理由を説明する。

「水なんてなくていいです」

私には理由に聞こえなかった。ここを立ち去る言い訳にしか聞こえなかった。私の心は不安で満たされてしまう。何もしなくていい。とにかくここにいて欲しかった。

そんな私の、必死な言葉が通じたのか、彼は呆れたように苦笑する。その苦笑が、いつもと違ってなぜだか楽しそうだった。

「俺が欲しいんだよ。あとトイレにも行きたい。今夜は長そうだからな」

「……どっか行かないですよね？」

「どっかってどこだよ？」

「どっかはどっかです！行かないですよね？」

「どこも行かない」

「すぐ戻ってきて下さいよ？」

「解っている」

「じゃあ、行って来ていいです」

私は彼を解放する。彼は言った言葉に紛うことなく、すぐに戻ってきてくれた。

「言葉を曖昧にして結論を誤魔化しているわけでもないのに、察してくれないなんて鈍感すぎます。鈍感なんて言葉では括れません。成瀬さん専用に新たに言葉を作らないと私の気持ちが済みません。そうかと思えば、事件になると妙に鋭くなって、他の誰も気が付かないようなことに気が付いて、事件解決の立役者になるから性質が悪いです。きっと事件に必ずかわいい女の子が関わっているのが理由だと思えますよ。まあ、本人は絶対否定すると思いますが、私には解るんです。間違いありません。って成瀬さん聞いているんですか？成瀬さんはそうやって自分から眼を背けるからいけないのです。そもそも……」

と言った感じで、早速私は思いの丈を言霊に乗せて彼にぶつけた。正直、本人に向かって言っている時点で、これは愚痴ではなくクレームなのでは？と思わなかったこともなかったのだが、この際どっちでもいいだろうと開き直って、私は続けることにした。後半は一体何を言っているのか解らなくなってしまう、いつの間にやら舌が回らなくなってきた、そのまま眠ってしまった。

一体いつ眠ってしまったのか、全く覚えていないが、すっかりした気分だったことは間違いない。眠りについてしまった私だったが、冷静に自分を見ている大人な天使は、おそらく明日は全快している

だろうと、もはや予知にも近い予想をしていた。

Part. 5 side - N

気が付くと、リビングは光に包まれていた。どうやら朝になったようだ。この様子だと、雨は止んでいるだろう。しかしどうして寝起きの朝日はこうも不快なのだろうか。

目の次に、耳と鼻が正常に働き始める。耳には油のはねる音が届き、まだ何だか認識できないが、いい匂いが鼻をくすぐる。そこでようやく覚醒し、同時に理解した。

誰かが朝食を作っている。誰かって？決まっている。俺以外にこの家にいるやつだ。

俺は寝ぼけ眼をこすりながらキッチンに向かった。

「あ、成瀬さん起きましたか。おはようございます！」

俺のスウェットの上に俺のエプロンを着用してキッチンに立って挨拶をしてくる岩崎は、色気皆無である。

「今、何か失礼なことと思いませんでした？」

「……………」

どう考えてもこいつはエスパーだろうと思う。俺のことを鈍感と
いうのは、こいつの感覚が鋭敏すぎるからではないか。

「考えすぎだ。それで、体調はどうだ？熱は下がったのか？」

俺は岩崎からの突っ込みをやんわりかわす。

「熱はもうほとんどありません。体調もほぼ万全だといっても過言ではないと思います」

「熱は計ったのか？」

「計ってませんが、大丈夫です」

「いいから計ってみろ」

何でこいつは熱を計りたがらないのだろうか。しばらく駄々をこねていたが、何とか計らせると、

「三十六度八分」

「やっぱり大丈夫ですね、私平熱高めなんですよ。むしろ平熱より低い感じですねー」

怪しいことこの上ないな。とはいえ、実際調べようがないからな、こいつばかりは信じるしかない。

「ところで、人の家で勝手に何をしている」

一応聞いてみると、

「朝食を作ってるに決まっているじゃないですか。寝ぼけているんですか？」

寝ぼけてなどいない。行動のおかしさなら岩崎のほうは何倍も上だ。まああれだけ熱があったにもかかわらず、雨の中こんなところまでやってくるという信じられない行動よりはよっぽどましと言えるが。

何で朝食作っているんだ？とは聞かずに、俺は洗面所へ行き、顔を洗った。そこで初めて気が付く。まだ六時十五分だった。普段ならまだ寝ているところだ。あいつ、一体いつから起きていたのだろうか。

リビングに戻ると、すでに朝食ができたようで、岩崎が配膳をしていた。

「サンドイッチ」

が数種類。それとベーコンエッグ、ポテトサラダとちぎったレタス。もう一度思う。こいつ一体何時から起きているんだ？そして、一体何時に俺を起こすつもりだったのだ？

「成瀬さんは牛乳とコーヒーどっちがいいですか？」

「コーヒーをくれ」

「解りました。じゃあ私もコーヒーで」

準備ができると、俺と岩崎は向かい合って座り、

「いただきます」

食べ始めた。一口コーヒーをすする。まだ起きてから十分くらいしか経っていないため、まだ脳の一部が眠っている気がする。ここまで起きぬけに飯を食うのはいつ振りだろうか。俺は朝自分で飯を作るから、それなりに覚醒してから朝食を食べるからな。実際コーヒーの味ですらよく解らない。

「いかがですか？味のほうは」

「うまいような気がする」

「ってまだコーヒースすすただけじゃないですか。早く食べて下さい。我ながらなかなか上手に出来ました」

そう言った岩崎はいい笑顔で笑う。こいつ、昨日は熱でぐったりしてなかったか？本当に元気になってやがる。今だけ見ると、俺のほうが体調悪そうだ。自分で言うのも何だが。まあこいつが元気が取り得のパワフル娘だ。こうでなければ岩崎じゃない。昨日のはやはり違う人物だったのではないか。妙に弱気だったしな。かなり甘えてきたし。

俺はタマゴサンドを一つ手に取り、一口かぶりつく。

「うまい」

「そうですか？それはよかったです！もう大分料理にも慣れました。今では免許皆伝の腕前になったのではないかと自負しています」

自分で勝手に料理を始めて、勝手に免許皆伝になっていたら世話ない。

「さあどんどん食べて下さい。朝食は一日の活力の源です。いっぱい食べて元気に登校しましょう！」

これ以上元気になるつもりか。だが、元気な岩崎に俺は日常を感じていた。

「あ、私は勉強道具と制服を取りに行かなきゃいけないので、今日は早めにここを出しましょう」

「勝手に行け」

「一緒に行きましょうよ！」

何だが昨日と似たような展開だな。こいつ、昨日ので味をしめやがったのか？

「出発点が一緒に最終的な目的地が同じなんですから、一緒に行くべきです！」

「何だ、その自分勝手な理論は」

だいたい勝手にうちに來たのはそっちだ。まだ俺を巻き込む気か？

「どうして一緒に行って下さらないんですか？」

「面倒だからだ」

こいつのせいで俺の面倒臭がりに拍車がかかっている気がする。

「でも、成瀬さん昨日言っていたじゃないですか。私のわがママを聞くのが俺の仕事だって」

そんなことを言ったか？何か若干違う解釈が加えられているような気がする。

「それって私は、成瀬さんにわがママを言うのが仕事ってことですよね？」

「どうしてそんな解釈になる。わがママなんて言わないに越したことはない」

「こうして朝食を作ってあげたじゃないですか」

「誰も作ってくれと言っていない」

「わがママですねえ。じゃあ私はいったいどうすればいいんですか！」

怒っている意味が解らない。誰がわがママだ。

「俺が寮に行かなければならない理由を教えてくれ」

岩崎は黙り込む。気のせいかな、顔が赤いな。

「お願いですから、もっとこういうことに鋭くなって下さい。でないと私がかわいそうです!」

どういうことか、さっぱり解らないな。以前から思っていたが、俺が鈍感であることについて一番気にしているのは岩崎だ。なぜこいつは俺が鈍感であることにに関して、こうもいろいろ言ってくるのだろうか。

とはいえ、このままじゃ話が進まない。俺は少し考えてみる。そしてすぐに思い当たる。

「まさか、俺と一緒にいたいからか?」
「なっ!」

叫んだ岩崎は、手に持っていたサンドイッチを落とし、固まった。はて、やっぱり違ったか?

「ななななな、何でそんなことになるんですか!何がどうなったらそんな答えが出てくるんですか!」

「いや、昨日言ってたから」

「言っていないです!」

「いや、言ってたから」

「言ってません!絶対言ってません!」

どうなっているんだよ。昨日のこと覚えていないのか?確かに悪

酔いした感じで、かなり絡みにくくはなっていたけど。

「まったく、訳解らないこと言わないで下さい。そんなに私と一緒にいたいんですか？」

それこそ全く言っていないんだが。

「どうでもいいですけど、早く食べちゃって下さい。七時には出ますよ」

俺と一緒にいくこと前提の話だな。それとちょっと待て。

「何でそんな早く出る必要がある。七時半で十分間に合うだろ」

「まあいいじゃないですか。早く起きたわけですから、早く登校するのは道理です」

全然道理じゃない。何で俺がそんな朝早くから登校しなくちゃならないのだ。俺はまったく無関係だぞ。

「さ、そろそろ諦めて下さい。無駄な足掻きですよ」

こいつは何でこんなに強気なんだよ。本来ならお願いする立場だぞ。ただでさえ、昨日からこんなに迷惑をかけているにもかかわらずこのずうずうしさ。何様のつもりだろうか。

しかし、と俺は思う。どうせ押し切られて、一緒に出ることになるだろう。考えてみたら、これはいつものパターンだ。岩崎がわがままを言い、それを俺がなし崩し的に承諾する。こうなってしまつたら回避できないだろう。だが、このまま岩崎の言うとおりにするのは癪だな。

「本当のことを言って、俺にお願いしろ。そうしたら一緒に行つてやる」

「え？ 本当のことって何ですかねー？」

誤魔化そうとしてやがる。やはりこいつがはっきり言わないから俺が察することができないのではないか。

「食事の後片付けは俺がやっというてやるから着替えて来い。それまでに考えをまとめておけよ」

そう言つて俺は席を立ち、食器を持ってキッチンへ向かった。

「え？ 本気ですか？ 成瀬さん、ちょっと待って下さいよ！」

完全に立場を逆転させた。なかなかいい案だったようだな。俺は聞こえない振りをして、食器洗いに取り掛かる。

「七時に出るんだろ？ 早く着替えてこないと時間がないぞ」

「わ、解りましたよ！」

慌てた様子で俺の寝室へ向かう岩崎。さあ、何と言ってくるかね。嘘丸出しでも、面白ければ許してやる。俺は余裕の表情で洗い物をした。

「準備オツケーです！」

何がどうなったのか解らないが、ハイテンションで戻ってきた。

「それで、どうなんだ。覚悟はできたのか？」
「任せて下さい！」

ほう。自信満々だな。その心は？

「言ってみろ」

「それは、成瀬さんが私の下僕だからです！」
「却下だ」

誰が下僕だ。ちっとも面白くないぞ。

「うー、じゃあ奴隷だから」

「却下。ニュアンスが一緒」

「え、えーっと、じゃあ私がお姫様だから！」

「上下関係の設定から離れろ」

「え、えー！そ、そうだなあ……」

自信満々の結果これか。残念で仕方ない。所詮こいつのボキャブラリーはこんなものか。期待した俺がバカだったのかもしれない。

「残念ながらこれじゃ、一緒に行くことはできないな」

「えー！成瀬さん、本当のことを言えって……」

「本当のことじゃないだろ。面白くもないし」

「面白いこと言わなきゃいけないんですかあ？」

「若しくは本当のことだ」

岩崎は考え込んでしまった。さっき時間をやったはずなのにな。これ以上チャンスをやるのは如何なものか。

「さて、時間も出来たことだし、コーヒーでも淹れよう」

「ちょ、ちょっと待って下さい！今言いますから！」

「よからう。これがラストチャンスだ」

「わ、解りました……」

岩崎が生唾を飲む。何でこんなに緊張しているのだろうか。いや、渾身のギャグを言うときは緊張するものだ。黙って待つことにしよう。

「ここで分かれたらもう二度と会えなくなってしまうかもしれないからです！」

風が凪いだ。空気が止まった。生きとし生けるもの全ては停止した。そして、時間は止まった。森羅万象が停止する中、岩崎の顔だけが徐々に、だがはつきりと赤くなっていく。それはまるで、トマトが熟れていくのを早回しで見ているかのよう。世界は停止しているのに、岩崎だけは早回し。そう、そのとき岩崎は確実に世界を置いていった。風邪は治ったが、岩崎は風になった。

……………そして世界は動き出す。

「何だそれ？」

「え？だ、だからここで二人が分かると、私は夢から目覚めて、本当の世界へ帰るわけです。その世界には成瀬さんはいなくて。だから、もう二度と会えない……って！」

俺は岩崎の説明を最後まで聞くことなく、笑ってしまった。

「何笑っているんですか！」

岩崎が怒鳴ったときには、俺の笑いは五合目を超え、一気に頂へ

と登りつめていた。

「わ、笑いすぎです！ひどいです、成瀬さん！そんなに笑うなんて、最低です！せっかく私が勇気を出して、恥ずかしいのを我慢して言ったのに、大笑いするなんて失礼すぎます！」

ここまでの大技を持っているとは思ってもよらなかった。正直驚いたね。はっきり言って俺の完敗だ。こんなに笑ったのは久しぶりだ。懐かしい気分になった。

「いや、恐れ入った。あんたにこんな奥の手があるとは。俺の負けだ」

「それは褒めて下さっているんですか？」

「ああ。これ以上ないくらい褒めている」

「ありがとうございます。でも、全然嬉しくないんですが」

なぜだが岩崎は不満そうだった。負けた俺のほうがすがすがしい気分だぜ。

「面倒だが仕方がない。約束だったからな。一緒に行ってやる。ちよっと待ってろ」

釈然としない様子の岩崎をリビングに置いて、俺は寝室へ向かった。着替えている途中、チラッと鏡を覗くと、そこに映る俺は若干涙ぐんでいた。そりゃあれだけ笑えば涙も出る。思い出すと、またしても笑いがこみ上げてきた。その勢いに耐えられず、俺はまたしても、寝室で一人爆笑してしまった。

「何思い出し笑いしているんですか！さっさと着替えて下さい！」

岩崎がリビングで怒鳴っているが、そんなことでこの笑いは止められない。俺はしばらく笑っていた。

そのせいで、準備が終わったときすでに七時を回っていた。

その五 side I

私が目を覚ましたとき、一番最初に視界に飛び込んできたのは、見慣れぬ天井だった。光で包まれるこの空間は、私の部屋ではない。ではどこだろうと、ぼんやり考え始めると、だんだん昨日の記憶が蘇り始め、その蘇る記憶とともに、私の顔もだんだんと紅葉して言った。

恥ずかしい！ 恥ずかしすぎる！ なぜ昨日の私はあんな醜態を晒してしまったのだろうか。これはもう後悔なんて生易しいものではない。このときほど、日本が銃社会でないことを呪ったことはない。今手元に銃があったならば、私は間違いなくこめかみに銃口を当てていただろう。それほど私はもだえていた。あれは恥ずかしすぎる！

一通り後悔した後、私は起き上がることにした。正直、彼と顔を合わせづらくはあったが、いつまでもベッドにいても意味はない。時計を確認すると、まだ午前五時半。いつもの起床時間まで、まだあと一時間以上もあった。しかし、二度寝すると言う選択肢はない。自ら目を覚ましたのだ。ここはすんなり起きておくべきだろう。私は、窓に近づき、カーテンを開けた。昨日遅くまで降っていた雨は、きれいに止んでいた。しかしどうして寝起きの朝日はこうも気分を高揚させるのだろうか。

私は大きく伸びをすると、洗面所へ向かった。とりあえず顔を洗って、水を飲む。ここに来てようやくやく思ひ出す。そういえば彼は昨夜、どこで眠ったのだろうか。

申し訳ないことに、彼の寢床は私が選挙させてもらっていた。残念ながら私の隣で寝ていた、なんてイベントはなかったので、おそらくリビングにあるソファ―にでも眠ったのだろう。私はリビングへ向かった。

案の定、彼はソファ―で身体を丸めて眠っていた。私はまたしても申し訳ない気分には駆られた。いくら上質なソファ―だとは言え、ソファ―は寝具ではない。さすがに寝苦しかったのではないか。しかし、こんな罪悪感は長続きしなかった。

私はソファ―の背から、正面に回りこんだ。すると、横向きになって身体を丸める彼の顔が見えた。その寝顔はまるで子供のようにだった。かわいらしい。彼を見て、こんな感想を抱くとは夢にも思わなかった。起きているときは、ほんの五年前まで小学生だったなんて、とてもじゃないが信じることができないような彼だが、眠っているときはなるほど子供のようにかわいらしい顔をしていた。

私は近づいて、目の前にしゃがみこんでみる。相変わらず無表情に近い。そして、私との距離が近い。かつて、これほど近い距離で彼の顔をまじまじ見たことがあっただろうか。答えは否。当たり前だ。こんな近くで彼の顔なんて、直視することができない。間違いなく眠っているのに、私は顔が熱くなってしまうている。

彼も夢を見るのだろうか。見るならどんな夢を見ているのだろうか。夢とは記憶を整理するために見るらしい。私は彼の夢に登場しているのだろうか、などと妄想丸出しの恥ずかしい考えが頭をよぎり、私はますます顔を熱くした。すると、彼はわずかにうなり、眉間にしわを寄せた。

「……………」

まさかとは思うが、嫌なタイミングだった。苦悩の表情とうめき声は、私が夢に登場したからではないだろうか。私は夢の中でも迷惑をかけているのか。いや、それが私に対する彼の評価ということか。夢とは言え、嫌な感じだった。

何となく負けた気分になったので、私は仕返しの意味もこめて、彼の頬をつついてみる。反応はない。今度はつまんでみる。すると彼は嫌がるように、一層眉をしかめ頭を動かした。あまりに微笑ましい反応。私は思わず声が出そうになった。調子に乗って、鼻をつまんでみる。すると、

「うーん……」

一際大きな反応を見せて、うなった。さすがに焦った。起こしてしまったかと思って、私は妙な大勢で身構える。もし起きてしまったら、一体何て言い訳をしよう。

「無防備にリビングで眠っているのがいけないですよ」

一体何様だろうか。誰のせいでリビングで眠っているのか、と言われたら私は誤るしかできない。

「寝顔があまりにかわいらしくて、つい」

一体どこの変態だろうか。誘拐犯とかがいいそうなセリフである。私は前科持ちにはなりたくない。

「もう起きる時間ですよ」

まだ六時にもなっていない。今何時だと思っているんだ、と聞かれたら、私は謝るしかない。

いろいろ考えたのだが、やはりというか何というか、答えは出なかった。実際のところ私の不安は杞憂に終わり、彼は小さく寝返りを打つと、そのまま静かに寝息を立て始めた。ほっとする私。悪いことはするものじゃないな、などと思いながらも、とてもいいものを見たという気持ちで、心が満たされていた。写真を撮ることができないのが、とても残念である。こんなにかわいらしい彼を知っているのは、私くらいなのではないか。

それからしばらく、静かに彼の寝顔を眺めていた。そして次に私が思いついたのは、朝食を作ることだった。二月ごろから料理を始めたのだが、何だかんだ、彼に料理を食べてもらったことはない。ここは昨日の詫びもこめて、朝食を作るべきなのではないか。これはチャンスとも言える。

しかし考えてみると、凝った者を作る時間はないし、重たすぎても朝食にふさわしくない。考えてみたら、私は制服を取りに帰らなければいけない。ある程度時間に余裕を持って出発しなければならぬ。諸事情を踏まえつつ、何を創ろうかと考えた結果、サンドイッチを作ることにした。

「失礼しまーす……」

誰に言うでもなく、声に出して、冷蔵庫を開ける。さすがと言ったところか。整理整頓の行き届いた冷蔵庫だった。食材が少ないわけではない。ある程度、何でも作れるくらいの食材はそろっているが、この行き届いた整理具合。こんな高校生男子は彼くらいなのではないだろうか。

食材を見ながら何を作ろうか考え、調理に入る。まずまな板と包丁を軽くゆすぎ、野菜から切っていく。作り始めてから思ったのだが、なぜ私はこうも調理器具の場所を把握しているのだろうか。

調理は滞りなく進んでいった。さすがにキッチンが広いと、作業がさくさく進んだ。料理に請っている彼が使うキッチンだけあって、とても使いやすかった。彼と一緒にいると、学ことが多くて困る。

ある程度作業が終わり、残りは盛り付けくらいになってきたとき、リビングのほうで物音がした。どうやら彼が起きたようだ。私はコーヒーマーカーを起動させ、カップを用意した。

しばらくすると、寝ぼけ眼の彼がキッチンに現れた。こんな表情も私にはとても新鮮に写り、かなり頬が緩んでしまった。

「あ、成瀬さん起きましたか。おはようございます！」

挨拶をするが、反応はない。代わりに、何だが嫌な感じの視線が私の外見に注がれる。

「今、何か失礼なことと思いませんかでした？」

「……………」

この無言の返事は、行程と捉えて問題ないだろう。私にも言い訳はある。何しろ、ここではこの服しかないのだ。しかも借り物なのだから、その上からエプロンを着用するのは当然だと言えるだろう。言い訳というより、かなり常識的な行動である。

彼はどうしても良さそうにため息をつくと、

「考えすぎだ。それで、体調はどうだ？熱は下がったのか？」

「熱はもうほとんどありません。体調もほぼ万全だといっても過言ではないと思います」

「熱は計ったのか？」

なぜこうも熱を計れというのだろうか。心配してもらえるのは嬉しいが、今日はさすがに学校に行きたい。全快していると自信を持っていえるのだが、万が一微熱でもあったら、休めとか言われてしまうのではないだろうか。ここは回避すべきところだろう。

「計ってませんけど、大丈夫です」

きっぱり言い切ったのだが、

「いいから計ってみろ」

一言で押し切られてしまった。その後もどうにかしようと、回避行動を取り続けたのだが、最終的にかわしきることができず、彼から体温計が手渡されてしまった。仕方なく体温を計る私。そして待つこと数十秒。体温計がチープな機械音を発する。

「三十六度八分」

昨日の悪ふざけのこともあり、手に取った瞬間、彼に奪われてしまい、数値が読み上げられる。私の平熱より若干高めだったのだが、ここはしらばっくれることにする。

「やっぱり大丈夫ですね、私平熱高めなんですよ。むしろ平熱より低い感じですねー」

さすがの彼も、これにはどうしようもなかったみたいで、半ば諦めたように頷いてくれた。そして、

「ところで、人の家で勝手に何をしている」

一応聞いてみた、と言った感じで、私の行動に関して質問をしてきた。怒られたのだろうか、若干引いてしまったのだが、そんな感じではなかったので、

「朝食を作ってるに決まっているじゃないですか。寝ぼけているんですか？」

と、適当にはぐらかしておいた。さすがに昨日の罪滅ぼしです、とは言えなかった。そんなはずはないのだが、きれいさっぱり忘れてしまっているという、希望的観測を捨てきれず、私は誤魔化すことにしたのだ。彼のそれ以上は何も言わず、キッチンから退散していった。どうやら洗面所に行って、顔を洗ってきたらしい。

再び彼がキッチンに戻ってきたときは、全ての準備が整い、あとは配膳するだけというところまでできていた。そんな私の様子を見て、彼が、

「サンドイッチ」

と呟く。どうやら私が作っているメニューを見て、言ったらしい。見たまんまである。いちいち口に出す必要のない言葉。まだ寝ぼけているのだろうか。こんなことをいう彼はとても新鮮だった。

「成瀬さんは牛乳とコーヒードっちがいいですか？」

「コーヒーをくれ」

「解りました。じゃあ私もコーヒーで」

準備ができると、私と彼は向かい合って座り、

「いただきます」

食べ始めた。私はまずコーヒーをすする。コーヒーメーカーで作ったものだったが、今日はいつもと違った味がした。おいしいというより、よく解らないが感動的な味がした。自分でも何を言っているのか解らない。

今度は自分で作ったサンドイッチを一つ手に取り、そのまま一口いただいた。うん、われながらおいしくできたと思う。たぶん彼の口にも合うだろう。

「いかがですか？味のほうは」

「うまいような気がする」

何だが曖昧な言葉だったが、嬉しいことには変わらない。私は得意満面で、当たり前だ、と言おうとしたのだが、顔を上げて彼を見ると、

「ってまだコーヒーすすっただけじゃないですか。早く食べて下さい。我ながらなかなか上手に出来ました」

そう言った私は自然に微笑んだ。昨日とは打って変わって、今日は体調がかなりよかった。昨日の不調が嘘のようだ。本当に嘘だったらよかったのに、と思わなくもないのだが、昨日の不調が嘘になっってしまうと、現在の状況も嘘になってしまうので、自重しておく。

彼はタマゴサンドを一つ手に取り、一口かぶりつく。そして一言。

「うまい」

「そうですか？それはよかったです！もう大分料理にも慣れました。今では免許皆伝の腕前になったのではないかと自負しています」

自分で勝手に料理を始めて、勝手に免許皆伝になっていたら世話がないな、と自分でダメ出しをして、勝手に微笑んだ。体調より、機嫌のほうが絶好調かもしれない。

「さあどんどん食べて下さい。朝食は一日の活力の源です。いっぱい食べて元気に登校しましょう！」

思った以上に体が回復していて、私はようやくいつもの私に戻りつつあった。

「あ、私は勉強道具と制服を取りに行かなきゃいけないので、今日は早めにここを出ましょう」

舌のほうもいつもの調子を取り戻し、あっさりこんなことを言うてみる。すると、

「勝手に行け」

当然のように、断られた。

「一緒に行きましょうよ！」

私が逆の立場だったら、当然一緒に行くと思う。

「出発点と一緒に最終的な目的地が同じなんですから、一緒に行くべきです！」

「何だ、その自分勝手な理論は」

しかし、彼にとっては自分勝手な理論であつたようだ。

「どうして一緒に行つて下さらないんですか？」

「面倒だからだ」

「でも、成瀬さん昨日言っていたじゃないですか。私のわがママを聞くのが俺の仕事だって」

何か違うような気がしたが、大体合っているだろう。つまるところ、こういうことであっているはずだ。

「それって私は、成瀬さんにわがママを言うのが仕事ってことですよね？」

「どうしてそんな解釈になる。わがママなんて言わないに越したことはない」

「こうして朝食を作つてあげたじゃないですか」

「誰も作ってくれと言つてない」

言われると思った。それにしても、本当にデリカシーというものが欠けている。いや、かけているなんていう表現じゃ生ぬるい。欠落しているというのが、妥当だ。こんな会話をしていると、機嫌のよかつた私もだんだんヒートアップしてしまう。

「わがままですねえ。じゃあ私はいったいどうすればいいんですか！」

「俺が寮に行かなければならない理由を教えてくれ」

言われて、私は黙り込んだ。これでは昨日の繰り返しだ。本当に昨日の出来事を忘れてしまったのだろうか。夢であってほしいと願いながらも、こうして自分の都合で覚えてほしいというあたり、やはり彼の言うとおり、私はわがままなのだろうか。しかし、これに関しては鈍感すぎる彼に、落ち度があるだろう。

「お願いですから、もっとこういうことに鋭くなって下さい。でないと私がかわいそうです!」

私がいかに必死になっているからか、彼は黙り込んで考え始めた。だが、シンキングタイムは意外に早く終わった。

「まさか、俺と一緒にいたいからか?」

「なっ!」

まさかそんなことを言われると思わなかった。私は思わず叫んでしまい、持っていたサンドイッチを落としてしまった。合っているといえは合っている。しかし、私はそんなことを言った覚えはない。どうしてそんな解釈が出てくるのか。全く的外れでないあたり、性質が悪いといえるだろう。

「ななななな、何でそんなことになるんですか! 何がどうなったらそんな答えが出てくるんですか!」

「いや、昨日言ってたから」

「言っていないです!」

「いや、言ってたから」

「言ってません! 絶対言ってません!」

完全に否定しておいて、思い出した。昨日、幾度となく部屋を出

て行こうとする彼に向かって、言ってしまったような気がした。本当に恥ずかしいことをしてしまった。しかし、いまさら認められないし、そもそもこれ以上愚考を重ねるつもりもない。

「まったく、訳解らないこと言わないで下さい。そんなに私と一緒にいたいんですか？」

私は無理矢理誤魔化すことにして、話をそらすことにした。

「どうでもいいですけど、早く食べちゃって下さい。七時には出ますよ」

「何でそんな早く出る必要がある。七時半で十分間に合うだろう」

「まあいいじゃないですか。早く起きたわけですから、早く登校するのは道理です」

彼が諦めモードになってきている。ここまで来れば、あとは強気に攻めれば押し切ることができるだろう。いつもの勝ちパターンである。

「さ、そろそろ諦めて下さい。無駄な足掻きですよ」

勝利宣言をした私だったが、ここに来て彼が再び黙り込んだ。あれ？おかしいな。いつもならため息をついて、解ったよ、と妥協にも似た了承をくれるのだが。彼もいつものパターンになっていることに気づいてしまったのだろうか。

私は若干の恐怖を覚えた。相手の裏を読むことには、絶対の強さがある。こういうことに関しては、かなりの上策を提示してくるのが彼なのだ。私が見えない冷や汗を見えない右手で拭っていると、

「本当のことを言って、俺にお願いしろ。そうしたら一緒に行つてやる」

案の定こんなことを言ってきた。

「え？ 本当のことって何ですかねー？」

何とか誤魔化そうと、三文芝居を打ってみる。しかし、良かれと思つてやったこの策が裏目に出ってしまった。

「食事の後片付けは俺がやっというてやるから着替えて来い。それまでに考えをまとめておけよ」

どうやら私が本心を隠していることがバレてしまったようだ。

「え？ 本気ですか？ 成瀬さん、ちょっと待って下さいよ！」

焦った私を無視して、彼はお盆を持ってくると、本当に片づけを始めてしまった。

「七時に出るんだろ？ 早く着替えてこないと時間がないぞ」

「わ、解りましたよ！」

完全に立場を逆転されてしまった私は、こう言うしかなかった。何とかいい作戦を考えなければ。

「準備オッケーです！」

私は昨日着てきて私服に着替えながら、作戦を考え、準備万端でリビングに戻ってきた。我ながらいい作戦だと思う。これで勝てる！

「それで、どうなんだ。覚悟はできたのか？」

「任せて下さい！」

あとでほえ面かかないで下さいよ、と付け加えたかったが、止めといた。

「言ってみろ」

彼の言葉でゴングが鳴り響いた。私は息を大きく吸い込んで、自信満々でこう言い放った。

「それは、成瀬さんが私の下僕だからです！」

すると、

「却下だ」

即座に却下されてしまった。おかしい。私の作戦は完璧だったはずだ。しかし、嘆いていても仕方ないので、第二第三の作戦を実行する。

「うー、じゃあ奴隷だから」

「却下。ニュアンスが一緒」

「え、えーっと、じゃあ私がお姫様だから！」

「上下関係の設定から離れろ」

「え、えー！そ、そうだなあ……」

他に手段は残されていないかった。今更だが、上下関係の設定ばかりだった。うかつだった。盲点だった。私が後悔の念に苛まれていると、彼があからさまに大きなため息をついた。私は思わず、びくっと肩を震わせてしまう。そして、

「残念ながらこれじゃ、一緒に行くことはできないな」

「えー！成瀬さん、本当のことを言えて……」

「本当のことじゃないだろ。面白くもないし」

「面白いこと言わなきゃいけないんですか？」

「若しくは本当のことだ」

うかつだった。面白い方向で考えていれば、もう少しましな作戦が立てられたかもしれない。悔やんでも悔やみきれない。今更頭を抱えても、いい考えがまったくといっていいほど思いつかない。そんな私の耳に非情の言葉が届いた。

「さて、時間も出来たことだし、コーヒーでも淹れよう」

「ちょ、ちょっと待って下さい！今言いますから！」

「よからう。これがラストチャンスだ」

「わ、解りました……」

私は生唾を飲む。正直、昨日以上に恥ずかしいことだが、言うしかないのだろう。できればこのことは言いたくなかった。私は息を大きく吸い込んで、覚悟を決めると、真実を口にした。

「ここで別れたらもう二度と会えなくなってしまうかもしれないからです！」

風が凪いだ。空気が止まった。生きとし生けるもの全ては停止し

た。そして、時間は止まった。森羅万象が停止する中、私の顔だけが徐々に、だがはつきりと熱を帯びていく。それはまるで、温室効果ガスによって、地球の温度が上昇していく様子を早回しで見ているかのよう。世界は停止しているのに、私だけは早回し。そう、そのとき私は確実に世界を置いていった。風邪は治ったが、私は風になった。

……………そして世界は動き出す。

「何だそれ？」

呆れるほど、普通の言葉だった。彼はまったく理解できていなかったようだ。

「え？だ、だからここで二人が別れると、私は夢から目覚めて、本当の世界へ帰るわけです。その世界には成瀬さんはいなくて。だから、もう二度と会えない……………って！」

私は恥ずかしい思いを必死で隠して、先ほどの発言について説明を開始する。しかし、説明が進んでいくにつれて、彼の表情は壊れていき、それは豪快な笑い声となって顕現した。

「何笑っているんですか！」

私は思い切り怒鳴った。正直近所迷惑になるくらい大きな声で怒鳴ったのだが、それ以上に彼が大声で笑っていた。温厚で有名な私も、さすがに頭にきた。

「わ、笑いすぎです！ひどいです、成瀬さん！そんなに笑うなんて、最低です！せっかく私が勇気を出して、恥ずかしいのを我慢して言

ったのに、大笑いするなんて失礼すぎます！」

私は本気で恥ずかしかった。ここ最近、ここまで本気で恥ずかしい思いをした覚えがない。だから本気で怒鳴ったのだが、彼はそんなこと意にも介さず、

「いや、恐れ入った。あんたにこんな奥の手があるとは。俺の負けだ」

ここまでバカにされると、本気で怒っている私のほうが敗者であるような気がする。

「それは褒めて下さっているんですか？」

「ああ。これ以上ないくらい褒めている」

「ありがとうございます。でも、全然嬉しくないんですが」

本気で褒めてくれているようだったが、なおさら納得できなかった。面白いことを言ったつもりなど、これっぽっちもなかっただけに、これほど褒められると、逆に釈然としなかった。しかし、それになりに見返りはあった。

「面倒だが仕方がない。約束だったからな。一緒に行ってやる。ちよつと待ってろ」

彼は私一人をリビングに残して、寝室に向かっていった。どうやら本当に一緒に行ってくれるらしい。いったい何が彼を動かしているのか、解らなくなってしまった。そこまで笑いに関心のある人だとは思っていなかったのだが、これからは設定を改めなければならぬ。これからは笑いというものを勉強して、会話に盛り込んでいこう。

そんなよく解らない決意をしていると、寝室のほうから笑い声が聞こえた。どうやらまだ笑っているらしい。さすがに笑いすぎだ。

「何思い出し笑いしているんですか！さっさと着替えて下さい！」

リビングから怒鳴ったのだが、彼の笑い声は一向に止まなかった。いっそ寝室に乗り込もうかと思ったが、着替えている最中だと申し訳ないので、止めといた。しばらく聞いているうちに、何だか慣れてしまった。

しかしそのせいで、準備が終わったときすでに七時を回っていたことには、再び怒りを覚えた。

Part. 6 side - N

「何怒っているんだ？」

「自分の胸に聞きやがって下さい」

道中、岩崎はずっとこんな調子だった。口が悪いぞ。

「顔が赤いぞ。原因は熱じゃないようだがな」

「黙って歩いて下さい！ええ、もちろん原因は熱じゃありませんとも！」

珍しく俺から話しかけてやっているのに。まったく人の厚意というやつを知らないようだな。

「成瀬さんはやっぱり最低です。私が勇気を出して言ったのに。あんまりです。あんなに笑われたら私がかawaiiそうです」

岩崎は、何事か呟きながら、ものすごい勢いで前進している。競歩でもしているつもりだろうか？

そのまま俺を放っておいて、先に行ってしまうのかと思ったら、
「何しているんですか？早くして下さい！」

とやおら振り返り、叫んでいた。

どうやら俺は何かをやらかしてしまったらしい。いつもと様子が違うが、怒っているようだ。原因は解っている。俺が大爆笑したからだ。まあ俺とて少しくらいは悪いと思っている。だが、止めることができなかったのだ。俺も止める努力はした。しかし、如何せん

相手が悪かった。うう、やばい。また発作が。

「ちょっと！また笑っているんですか？いい加減本気で怒りますよ」
どうやら今日は本気らしい。さてどうすればいいのだろうか。謝っただけでは許してくれそうにない。

「悪かったよ。いい加減しつこかったな」

しかし俺には謝るしかなかった。

「しつこいにもほどがあります。ものには限度ってものがあるんです。その辺を無視して行き過ぎると、暗黙のルールから逸脱します。成瀬さんは完全にルール違反です！」

「解っている。だからこうして謝っている」

「全然反省の色が見えません。上辺だけの謝罪なんて、してほしくないです。一昨日きやがれです」

言葉遣いが悪くなっているな。こうなってしまっでは取り返しがつかない。せっかく謝ったのに取り付く島がないのでは、俺としても面白くない。最後の手段だな。

放っておこう。それが一番だ。岩崎はテンションの上下が激しいことで有名だ。それはずっと機嫌悪い状態が続かないということの意味している。つまり自然に機嫌よくなるわけだ。第一、昨日あれだけ面倒を見てやった俺が、どうして機嫌をとらなければならない。

俺が黙ると、なぜか岩崎は歩く速度を緩めて、俺の横に並んできた。

「何だ？」

「別に何でもありません。ちゃんと前見て歩いて下さい。転びますよ」

理解できないね。この女の考えていることは。まあ気にしなくていいようなので、前を向く。今思えば普通のことだ。最近では俺の隣にいるのはいつものこの女なのだから。

……それにしてもやけにくつついて歩いてくるな。歩きにくいっ
たらない。気にするなど言われてもこれでは気になってしまう。俺
は斜め下にある岩崎の顔を横目で盗み見る。すると岩崎は、

「……………」

なぜだか幸せそうな顔をして、やや赤面していた。

「あんた、大丈夫か？」

「え？な、何ですか？」

いや、誰だって心配になる。ほんの十秒前まで不機嫌オーラを振りまいていたやつが、幸せそうに微笑んでいるんだからな。幻覚でも見えているんじゃないだろうな。一応言っておくけど、ここはお花畑じゃないぞ。

「どんどん俺のほうに寄ってきているぞ。顔も赤いし。熱がぶり返してきたんじゃないか？」

俺がそう言うと、岩崎は一瞬むっとした表情を浮かべ口を開いたが、その開いた口は言葉を発することなく再び閉じてしまった。そして少し間が開き、

「そうですね、もしかしたら熱が出てきたかもしれません。成瀬さん計って下さい」

こんなことを言ってきた。計れて、もちろん体温計など持っていない。仕方ないので、岩崎の顔に手のひらを当てる。

「若干熱いな」

俺がそう言うと、岩崎はくすぐったそうに笑い、

「やっぱりそうですか。少し暑いです」

やっぱり、じゃない。この状況は結構まずいのではないだろうか。

「大丈夫なのか？」

「はい。朝葉も飲みましたし、今日は学校に行きたいですから」

そう言って微笑む岩崎は、確かに体調が悪そうには見えない。無理しているようにも見えない。結局のところ、本人しか解らないところなので、本人が大丈夫と言うのならそれに従うしかない。

「無理するなよ。俺が迷惑だ」

あんたが無理すると、最終的に俺のほうまで火の粉が飛んでくるんだ。二日連続でうちに泊まるとか言うなよ。

「でもそれが成瀬さんの仕事なんですよね？」

「仕事なんてしないに越したことはない」

「成瀬さんは本当に引きこもりですね」

今思ったがどうやら機嫌はすっかり直ったようだ。やはりこいつには氣を回すだけ無駄なのかもしれない。

「それで、さっそくというわけではないのですが、一つお願いが」「何だ？」

うちに泊めろっていうのはなしだぞ。

「腕を貸してもらえませんか？」

貸せるほど持っていない。それに生憎俺の腕は自在脱着式ではないので、貸すことはできないのだが。

というのはもちろん冗談で、足がふらつくから掴まらせてくれ、ということだろう。

「寮まででいいのですが」

倒れられても困るからな。俺は寛大に貸してやることにする。

俺が左腕を差し出すと、岩崎は小さくお礼を言い、右手を伸ばしてくる。俺の左腕に自分の右腕を巻き付けると、俺の上腕二頭筋辺りの制服を握り締めた。相変わらず岩崎の顔は赤い。

何となく周りが俺たちを見ているような錯覚に陥る。どうせ誰も見てないし、腕を組むなんていうのは最近じゃ珍しくないのだが、何となく氣後れしてしまうのは俺の氣が小さいせいだろう。まあ氣にしたって仕方ないし、開き直って歩くことにする。

俺が、前向きなんだか後ろ向きなんだか解らない方法で気持ちに整理をつけていると、岩崎が隣で呟いた。

「よく、家に帰るまでが遠足って言いますよね？」

「ああ」

どういう脈絡でその話が出てきたのだろうか。

「今の私はそんな状態なんです」

「……………」

全然意味が解らない。そんな状態ってどういうことだよ。情報が少なすぎると、どんなでたらめな仮説も否定できなくなるぜ。

「私、自室に帰らないと一日がリセットされた気にならないんです。つまり私にとって今はまだ昨日なんです」

岩崎の言い分はおそらくこうだろう。まだ自室に戻っていないがゆえに、一日がリセットされていない。それは家に着いていないがゆえに、遠足は終わっていない、という理論と同じである。こいつは現在遠足気分ということか。遠足が楽しくて仕方がない子供が、教師の言い回しを揚げ足取りのように捉え、家に帰らないという話があるが、そんなことなのだろうか。

「ですから、今私はこんなことができますんだと思います」

さっきから話が曖昧すぎるぞ。しかし、ここだけは理解できた。

「つまり寮に帰ると遠足は終わり、出てきたときはいつもの日常ってわけだ」

「そういうことです」

昨日は非日常だったというわけだ。確かに、四十度近い熱を出して他人の家に泊まるなんてことが日常的にあったまるか。そんな日常俺はごめんだ。日常は普通が一番だ。普通の定義付けをするつもりはない。俺が普通だと思ったらそれが普通、それで十分だ。

しかし、こいつの価値観では病気と遠足が同じ位置づけなのか？いや、気持ちは解らないでもないか。子供のころは、普段起きる時間に起きず、普段行く学校に行かず、普段やらなくてはいけないことをやらなくていい。病気になったときの、そんな非日常的な感じを楽しんだ。それは遠足に似ているのかもしれない。それは家に帰ったり、風邪が治ったりすれば終わる非日常で、一時の夢物語というわけだ。そう考えると、

「まるでシンデレラだな。寮に帰ったら魔法が解け、夢のような時間には終わってか」

独り言のように呟いた俺だったが、俺の左半身に引っ付いている岩崎にはその呟きが聞こえたようで……。

「！」

ふと足を止めた。

「どうした？」

俺も足を止め、岩崎の顔を覗き見る。すると、先ほどまでほんのり朱がさしていた頬が、むしろ青白くなっていた。

「気分でも悪くなったのか？」

岩崎は俺の問いかけを無視して、

「駄目です！ 帰りましょう、成瀬さん」

「は？ 帰っているだろ、寮に」

「違います！ 帰っちゃ駄目なんです！」

言っている意味が解らない。この短い会話の中で意見を正反対にされたのでは、俺はどうしたらいいのだ。しかし、岩崎は来た道を戻ろうと、俺の腕をぐいぐい引っ張る。

「とりあえず落ち着け。意見をはっきりさせろ。結局何が言いたいんだ？」

「だから、寮に帰っちゃいけないんです！」

「何で？」

ようやく理解できた。話の流れから考えると、簡単に解ったのかもしれないが。

どうやら岩崎は、俺の呟きに反応したらしい。そういえば先ほど俺を大爆笑させた発言にもそんなニュアンスの言葉があったな。

「ふざけたこと言ってないで、さっさと帰るぞ」

「だから駄目ですってばあ」

「俺はどこにも消えたりしないから」

つまりはこういうことだろう。というか、岩崎がはっきり言っていた。どうやら俺は岩崎の発言を結構軽く流してしまっているらしい。それが案外重要な発言であることが多いため、俺は鈍感などと

不名誉極まりない罵声を浴びせられるのだ。

「必ず待っててやるから、安心して寮に戻れ」

「本当ですね？嘘じゃないですよね？」

「本当だ」

「もしいなかったら、成瀬さんは私の奴隷ですからね？」

何てことを言いやがる。しかも真顔で。病み上がりじゃなかったら、本格的に頭を心配する。そして、全力で逃げる。まあ今は出来ないのだが。

「約束する」

「解りました。じゃあ帰りましょう」

ようやく頷いた岩崎だったが、不安そうな表情は解消されなかった。捕まっている腕にも力が入っている。

昨日もそうだったが、今日もどこかおかしい。いや、こいつの感覚では今はまだ昨日なのか。本当に魔法にでもかかってしまったんじゃないだろうか。正直性質の悪い魔法である。

女子寮に到着すると、俺はエントランスで待つことにして、岩崎を見送った。俺が信用できないのか、魔法が解けてしまうのが名残惜しいのか、岩崎の足取りはとても重く、こちらを何度も振り返っていた。やれやれだ。これでようやくあいつにとっての昨日が終わり、病という悪夢から解放される。実際岩崎にとって悪夢だったのか不明だが。俺にとって悪夢だったような気がするね。朝からすごく疲れた。よく眠れそうだ。

そして待つこと数分。

「お待たせしました！さあ学校へ行きましょう！」

いつもの雰囲気をまとい、岩崎が登場した。岩崎はもう俺に引っ付いてくることはなかった。それもそのはず。さっきまで岩崎は夢を見ていたのだから。だから先ほどの約束も、昨日の甘えた様子も全て夢なのだ。夢での約束など意味があるはずもない。自分の見た夢が、他人に影響を及ぼすはずなどない。だから岩崎はもう何も言わないだろう。

そんないつもの様子に戻った岩崎を見て、俺は静かに笑った。なぜかって？決まっている。俺は普通が好きだからだ。

その六 side I

「何怒っているんだ？」

「自分の胸に聞きやがって下さい」

思わず口が悪くなってしまう。

「顔が赤いぞ。原因は熱じゃないようだがな」

「黙って歩いて下さい！ええ、もちろん原因は熱じゃありませんとも！」

解ってて言っているところが、また嫌な感じである。彼が嬉しそうなのは、私にとっても喜ばしいことだと思っていたのだが、そうとも限らないのだと、今日はっきりと理解した。この人は、人をはかかって楽しむ人なのだ。

「成瀬さんはやっぱり最低です。私が勇気を出して言ったのに。あんまりです。あんなに笑われたら私がかわいそうです」

私は彼に対する恨み言を呟きながら、無心で歩を進める。何だか弱点を作ってしまったような気がする。いや、彼に強力な武器を渡してしまったと言ったほうが合致しているだろうか。とにかく今の私はかなり不利な状況だ。心の守りを嚴重にしておかないと、更なる弱点を作ってしまうそうだ。

これ以上不利な状況を作ってしまったくないために、自分に暗示をかけていると、ようやく気付く。私の隣に彼がいなかった。急いで周りを見渡す。すると、背後に彼の姿を発見。まだあんなところにいるのか。早く出たとは言え、寄り道しなくてはならないのに、なぜ

あんなにゆっくり歩いているのだろうか。

「何しているんですか？早くして下さい！」

私が彼に向かって叫ぶ。彼は軽くため息をつき、少しだけ歩くペースを速めた。そして、ふと何か考えるような表情になり、直後、またしても頬が緩み始めた。

「ちょっと！また笑っているんですか？いい加減本気で怒りますよ」

一旦つぼに入ってしまうと、なかなか抜け出してくれないので、それを阻止するために、私自ら駆け足で近づいた。今は外にいるのだ。さすがに黙って見ているわけにはいかない。

「悪かったよ。いい加減しつこかったな」

私が近づくと、彼は適当極まりない感じで、謝った。しかし、そんなもので許すつもりはない。もう一度きつく言っておく必要がある、と思った私は口を開く。

「しつこいにもほどがあります。ものには限度ってものがあるんです。その辺を無視して行き過ぎると、暗黙のルールから逸脱します。成瀬さんは完全にルール違反です！」

「解っている。だからこうして謝っている」

「全然反省の色が見えません。上辺だけの謝罪なんて、してほしくないです。一昨日きやがれです」

私がこういうと、彼は黙り込んだ。おそらくしばらく放置して、機嫌がよくなるのを待つつもりだろう。要するに、逃げ、である。これは私の勝ちということでもいいだろう。今後、一切この話題を禁

ずることにしよう。そしてもう一つ、勝者は敗者に対して、何でも自由にできる権利を持つ。せっかくだから、私もそれを行使することにしようと思う。

私は歩く速度を落とし、彼の隣に並んで、同じ速度で歩く。

「何だ？」

「別に何でもありません。ちゃんと前見て歩いて下さい。転びますよ」

私の変化に気付いた彼が、いぶかしんで問いかけてくる。もちろん私は答えない。私は勝者なのだ。敗者の言うことに耳を貸す必要はない。

私は徐々に彼に近づく。そして、私の肩が彼の腕に当たる。それは今まで入れそうで、入れなかった空間。今までは彼と私との間には、近くて遠い若干の距離があった。だが、今はない。それは少し動かせば、手と手が触れ合う距離である。

「……………」

意識すると、顔が熱くなった。普段ならこんなことは絶対に出来ない。でも今は、勝者なのだ。いつもの私なら、ここまでで許したかもしれない。しかし、今日はこんなもので許すと思ったら大間違いだ。私は次なる行動に出ようとする。すると、

「あんた、大丈夫か？」

突然声をかけられて、私は伸ばしかけた手を引っ込めてしまう。

「え？な、何ですか？」

「どんどん俺のほうに寄ってきているぞ。顔も赤いし。熱がぶり返してきたんじゃないか？」

私は思わずむっとする。相変わらずの鈍感っぷりだ。私の行動に關して、一切理解できていないらしい。私は言い返そうと思って口を開いたのだが、更なる名案が頭をよぎった。

「そうですね、もしかしたら熱が出てきたかもしれませぬ。成瀬さん計って下さい」

「若干熱いな」

手を伸ばし、私の額に手のひらを当ててくる。何度やってもくすぐったい。しかし、嫌な感じはしない。むしろくせになってしまいうような感覚だった。

「やっぱりそうですか。少し熱いです」

何でもないように言ってみせる私。だが、赤くなった頬はおそらく隠せていないだろう。しかし、彼は勝手に勘違いしてくれる。なぜなら私は昨日風邪を引いて熱があったからだ。

「大丈夫なのか？」

聞いてくる彼は冷静そのもの。とりあえず言ってみた、という感じに聞こえてしまう。本当に心配してくれているのか、甚だ疑問ではあったが、私の目的はこんなことではない。

「はい。朝葉も飲みましたし、今日は学校に行きたいですから」

私の言葉が真意かどうか、疑っているようではあったが、おそらく信じてくれるだろうと思う。きっと嘘には見えない。なぜなら本当に大丈夫だからだ。

「無理するなよ。俺が迷惑だ」

「でもそれが成瀬さんの仕事なんですよね？」

「仕事なんてしないに越したことはない」

「成瀬さんは本当に引きこもりですね」

彼はこの手の攻撃に弱い。こう言うと黙ってしまう。私が唯一知っている弱点である。今朝からかわれ続けてきたので、もっとお返しした気持ちもあったが、私の目的はこれでもないのです、ようやく本題に入ろうと思う。

「それで、さっそくというわけではないのですが、一つお願いが」「何だ？」

大きく呼吸して、意を決すると、口を開く。

「腕を貸してもらえませんか？」

言ってしまった。返事はなかなか返ってこない。いても立ってもいられなかった私は、続けて口を開いた。

「寮までいいのですが」

答えはなかったが、その代わりに左腕を差し出してくれた。私は小さくお礼を言い、右手を伸ばす。彼の左腕に自分の右腕を巻き付けると、彼の上腕二頭筋辺りの制服を握り締めた。たったそれだけで急激に体温が上昇した気がする。昨日から今日にかけて、私の体

温は激しく上下している気がする。

何となく周りが私たちを見ているような錯覚に陥る。どうせ誰も見てないし、腕を組む男女なんていうのは最近では珍しくないのだが、何となく気後れしてしまうのは、私がこの行為をそれなりに意識しているからだろう。相手が彼だからということが最大の要因であることは言うまでもないだろう。まあ気にしたって仕方ないので、開き直って歩くことにする。

ここでふと思ったのだが、昨日から今日にかけて、私は少しおかしい気がする。体調的なことではない。情緒不安定というわけでもない。私を感じた、少しおかしい、とは、気持ちの面である。なぜこうも積極的に動けるのだろうか。

言ってしまうえば、病気ということに託けて、甘えてしまっているだけなのだが、こういう状況なら何度かあったような気がする。しかし今までは、ここまで積極的に行動できなかった。その違いは何だろうか。

しばらく逡巡して、過去にもこれと似た感情を感じた覚えがあることに気がつき、何となく納得できる結論にたどり着いた。

「よく、家に帰るまでが遠足って言いますよね？」

「ああ」

どういう脈絡でその話が出てきたのか、きっと彼には解らないだろう。

「今の私はそんな状態なんです」

「……………?」

全然意味が解らない様子だ。彼は頭の上に大量の疑問符を浮かべている。

「私、自室に帰らないと一日がリセットされた気にならないんです。つまり私にとって今はまだ昨日なんです」

私の言い分はこういうことだ。まだ自室に戻っていないがゆえに、一日がリセットされていない。それは家に着いていないがゆえに、遠足は終わっていない、という理論と同じである。私は現在遠足気分なのだ。遠足が楽しくて仕方がない子供が、教師の言い回しを揚げ足取りのように捉え、家に帰らないという話があるが、そういうことなのだ。

「ですから、今私はこんなことができますんだと思います」

「つまり寮に帰ると遠足は終わり、出てきたときはいつもの日常ってわけだ」

「そういうことです」

昨日は非日常だったというわけだ。子供のころは、普段起きる時間に起きず、普段行く学校に行かず、普段やらなくてはいけないことをやらなくていい。病気になったときの、そんな非日常的な感じを楽しんだ。それは遠足に似ているのかもしれない。それは家に帰ったり、風邪が治ったりすれば終わる非日常で、一時の夢物語というわけだ。こういう考え方に彼も一応共感できたようで、頷いて黙り込んだ。彼も遠足が楽しみだと感じていた時期があったのだろう。小さいころの話とか少し興味がある。いつか機会があったら、聞いてみることにしよう。どうせ彼本人に聞いてもちゃんと答えてくれないと思うので、麻生さんに聞いてみることにする。写真などがあれば、是非とも見せてもらいたい。きっと彼をからかうネタに

なるだろう。もちろん本心から見てみたいと思う気持ちもある。

こんな楽しい妄想に浸っていると、黙り込んでいた彼が不意に口を開いた。

「まるでシンデレラだな。寮に帰ったら魔法が解け、夢のような時間には終わってか」

最初はなんの例え話か理解できなかった。しかし、

「！」

少し考えただけで、簡単に答えに行き着く単純な方程式だった。単純なだけに、それが真実のように感じてしまう。そう考えてしまった。私は思わず足を止めてしまった。

「どうした？」

彼も足を止め、私の顔を覗き見てくる。普段ならば、照れてしまうような行動だったのだが、今の私にはそんな余裕はなかった。

「気分でも悪くなったのか？」

私は彼の問いかけを無視して、

「駄目です！ 帰りましょう、成瀬さん」

と叫んでしまった。

「は？ 帰っているだろ、寮に」

「違います！帰っちゃ駄目なんです！」

彼は全く理解できていないようだった。言った私も訳が解らなくなっている。でも、とにかく帰ってはいけないことだけ理解できた。私は来た道を帰るよう、彼の腕をぐいぐい引っ張った。

「とりあえず落ち着け。意見をはっきりさせろ。結局何が言いたいんだ？」

彼の冷静な判断が、逆に苛立たせた。先に気づいたのは、彼なのに、何で私の言いたいことが解らないのだろうか。

「だから、寮に帰っちゃいけないんです！」
「何で？」

言った直後、彼の表情が変わった。ようやく気付いてくれたのだろうか、事の重大さに。などと期待していると、

「ふざけたこと言ってないで、さっさと帰るぞ」

全く気付いていなかった。

「だから駄目ですってばあ」

もう一度叫んだのだが、

「俺はどこにも消えたりしないから」

どうやら本当は気付いていたようだ。

「必ず待っててやるから、安心して寮に戻れ」

彼は呆れたように、面倒臭そうに言葉を紡ぐ。

「本当ですね？嘘じゃないですよね？」

「本当だ」

理解はしているようだが、全く信じていない様子だ。安心しろと言うが、私は全く安心できなかった。しかし、

「もしいなかったら、成瀬さんは私の奴隷ですからね？」

「約束する」

結局のところ、私は彼を信じるしかできなかった。

「解りました。じゃあ帰りましょう」

こうは言ったものの、私の不安は解消されなかった。捕まっている腕にも、自然と力が入ってしまう。

やはり今の私はおかしい。いつもならこんな不安に駆られない。本当に魔法にかかってしまっているのではないか。だとしたら性質の悪い魔法である。誰でもいいから早く解いてほしかった。誰でもいいからと言いつつ、私は隣を歩く彼を見上げる。私は、彼が解いてくれないだろうか、と思っていた。まるで、白雪姫に出てくる王子様のように。

とうとう女子寮に到着してしまった。エントランスに入ると、彼はここで待つと言い出す。未だ不安を拭い去ることができない私の足取りはとても重く、彼のほうを何度も振り返っていた。

エントランスから出ると、当然のように彼が視界から消える。そんなことある訳がないと自分を奮い立たせて、私は自分の部屋へと走り出した。

部屋に着いても、制服に着替えても、私は不安を拭い去ることができなかった。しかし、もう寮に着いてしまった。いい意味にしろ悪い意味にしろ、魔法は解けてしまうのだ。昨日は終わり、ようやく今日になったのだ。自分で言った言葉だ。だったら、部屋を出て、エントランスにいるであろう彼に向かって、私を取る行動は一つしかない。

私は決意を固め、部屋を出ると、彼の元へ向かった。

「お待たせしました！さあ学校へ行きましょう！」

いつもの雰囲気をもとい、私は彼に挨拶した。私はもう彼に甘えるつもりはなかった。それもそのはず。さっきまで私は夢を見ていたのだから。だから先ほどの約束も、昨日の甘えたことも全て夢なのだ。夢での約束など意味があるはずもない。自分の見た夢が、他人に影響を及ぼすはずなどない。だから私はもう何も言わない。おそらく彼も、何も言わないだろう。なぜなら、彼は日常をこよなく愛する人だから。

エピソード side-N

教室に到着したと同時に、俺は自分の席に座った。疲れた。何だか、岩崎に元気を吸い取られたようだ。

「おはよ」

隣の席の住人、真嶋が声をかけてくる。

「何でそんなに疲れているの？」

「いろいろあったんだよ」

説明するのも面倒臭いね。説明したとして、どうせ理解できまい。俺とて、未だによく解らないのだからな。解るのは悪夢にうなされていたということだ。俺がな。

「真嶋さんおはようございます！」

自分の席に荷物を置いてきたのだろう。岩崎が俺に遅れてこちらへ来る。

「おはよ。岩崎さん元気になったみたいだね」

元気になりすぎだ。

「はい。昨日はすみませんでした。携帯を忘れて外出してしまっで大変心配かけました」

「岩崎さんが元気でよかったよ。それで、どこに行っていたの？」

当然の質問だとは思うが、それは口に出してはいけない疑問だぜ、真嶋。

「はい、治療を受けていました」

「ああ、病院かあ」

いけしゃあしゃあと嘘をつくなよ。俺はそう思ったのだが、

「いいところでした。かなり手厚く看病していただきました。とてもいい気分で過ごせました」

それは嘘というより、岩崎流の感謝だったかもしれない。

「へえ。そんなところあるんだ？場所はどこ？」

「近いですよ。真嶋さんも病気になったら行ってみて下さい。真嶋さんもきっと気分よく病気を治せると思います。ただし、そのときは私も同行させていただきますが」

岩崎は人のよさそうな笑顔を浮かべているが、きっと心では舌を出しているに違いない。

真嶋は理解できない、といった感じで首をかしげている。

「俺がそこに行ったらどうなるんだ？」

「成瀬さんが行ってもこれといった利点はありません。別のところに行くことをお勧めします」

やっぱりか。そうだと思ったよ。

「そこってどういうところなの？人によって対応が違うわけ？」

「そうです。人によります。でも真嶋さんなら大丈夫ですよ」

俺は、不安そうな真嶋とかなり楽天的な発言をする岩崎の声を聞きながら、机に伏せた。身体がだるいし、眠いし、極度に疲れたしで、今日は最悪だ。授業中耐えられるだろうか。俺は嫌な予感に襲われながら、目を閉じた。何度も言うようだけど、俺の嫌な予感はよく当たる。

俺が自室のベッドで目を覚ますと、時刻は午後四時。

どうしてそんな時間に自室のベッドで目を覚ましたのかというと、早退したからだ。

自分の異常に気が付いたのは、三限が終わったときだ。朝にいろいろあったからとは言え、身体がだるすぎる。晴れているにもかかわらず、俺はとても寒かったし、だんだん頭が重くなってきていた。そこでようやく考えたのだ。俺は風邪なのではないか、と。

保健室に行って、体温を計ってみたら案の定熱があった。三十七度九分。保健室で休むという案もあったのだが、どうせならゆっくり眠りたい。俺は帰る選択をした。

家に着いて体温を計ってみたら三十九度にも達していて、すぐさま着替えて、倒れこむようにベッドについたというわけだ。

そして、今は四時。普段なら今頃部室で雑誌でも読んでいる時間だ。だが、今日部活はないだろうと、ある意味確信に近い予想をする。別に熱のせいで未来予知ができるようになったというわけでは

ない。あくまで予想だ。さらにその予想に付け加えるとしたら、きっとTCCのメンバーはすぐさま帰宅しているだろう。

俺はおもむろにベッドから這い出て上着を羽織る。キッチンに行き、一口水を含むと、今度は玄関へ向かった。

先ほどの予想にもう一言加えよう。もうすぐうちの玄関チャイムが鳴らされる。鳴らす相手はもちろん、こいつ以外にいないだろう。

「成瀬さん、来ましたよ！調子はどうですか？」

やれやれ。つまり、今日は俺が魔法にかかり、夢を見る番らしい。今回は悪夢でないことを祈るぜ。

エピソード side—I

教室に到着したと同時に、私は自分の席に荷物を置き、自分の席に着く彼の元に向かった。傍から見ると限り、何となく彼は疲れているように見えた。真嶋さんと話す様子も、どことなく元気がない。

「真嶋さんおはようございます！」

少し気になった私だったが、いつもどおりに振舞うことにする。まず真嶋さんに謝らなければいけない。

「おはよ。岩崎さん元気になったみたいだね」

「はい。昨日はすみませんでした。携帯を忘れて外出してしまつて大変心配かけました」

「岩崎さんが元気でよかったよ。それで、どこに行っていたの？」

当然の質問だ。だけど、聞いてほしくない質問でもある。案の定、彼は知らん顔をしている。彼は言いにくいかもしれないが、私ははっきりと言うことが出来る。

「はい、治療を受けていました」

「ああ、病院かあ」

病院ではないが、私は嘘はついていない。間違いなく治療を受けていたのだ。考えてみれば、私はまだ感謝を伝えていなかったような気がする。しかし、表立って言うことはできない。周りの目というものもあるし、何しろ昨日のことは夢になってしまっているのだ。なので、私はこんな方法で感謝を伝えることにする。

「いいところでした。かなり手厚く看病していただきました。とてもいい気分で過ごせました。私がどんなわがままな要求をしても、ちゃんと応えてくれました。本当に感謝しています」

「へえ。そんなところあるんだ？場所はどこ？」

「近いですよ。真嶋さんも病気になったら行ってみて下さい。真嶋さんもきつと気分よく病気を治せると思います。ただし、そのときは私も同行させていただきますが」

ここまで言っても、きつと真嶋さんは行かないだろう。私は、真嶋さんが行かないこと前提で話をしているのだ。本当に言ってしまったら、本当に同行させてもらうつもりだ。しかし、当の真嶋さんは理解できない、といった感じで首をかしげている。

そこで、今まで黙って聞いていた彼が話に入ってきた。

「俺がそこに行ったらどうなるんだ？」

どうやら私の意図に気付いてくれたようだ。感謝の気持ちまで気付いてくれているだろうか。いや、彼のことだから気付いていないだろう。

「成瀬さんが行ってもこれといった利点はありません。別のところに行くことをお勧めします」

私は上がってしまう口角を、無理矢理修正しながら話す。やれやれといった感じの反応をする彼も、楽しそうに苦笑してくれた。

「そこってどういうところなの？人によって対応が違うわけ？」

「そうです。人によります。でも真嶋さんなら大丈夫ですよ」

少し不安そうな顔をする真嶋さん。やはり彼女はまともな感性を持った人だった。きつと行くことはないだろう。それから先生が教室にやってくるまで、彼女は私の体調を気遣ってくれた。その病院には二度と行かないほうがいいと、遠まわしに言っているようで、騙してしまった罪悪感と、彼と秘密を共有している嬉しさが、私の中で複雑に絡み合っていた。

彼の様子がおかしいと気づいたのは、授業が始まって比較的すぐのことだった。彼は口癖のように面倒くさいというくせに、授業だけはいつも真面目に受けていた。その彼が、だるそうに机に伏せていた。昨日からいろいろあって、精神的に疲れているのだろう。最初はそんな風に考えていた。しかし、二時間目が終わったとき、それは具体的に表面化してきた。そして、三時間目が終わると、彼自身が自覚してしまったようで、保健室に向かい、そのまま早退してしまった。

私は申し訳ない気持ちで、授業をまともに受けることが出来なかった。ここまで迷惑をかけ続けるとさすがに笑えない。後悔しても仕切れない。私の後悔は、放課後まで続いた。

授業はいつもどおり滞ることなく進んでいき、定刻どおりに放課後を迎えた。私はまだ立ち上がることが出来ずにいた。すると、そこに真嶋さんがやってきて、

「岩崎さんは、部活に行くの？」
「ええ、そのつもりですが」

「あのさ、一緒にお見舞い行かない？成瀬の」

そこでようやくお見舞いという言葉が私の頭の中に芽生えた。なぜ今の今まで一切思いつかなかったのだろうか。そうだ、お見舞いに行こう。そのほうが、こうやって後悔して無駄に時間を使うより、よっぽど上手な使い方である。昨日の恩返しもできるし、今の気持ちも幾分晴れるだろう。

「そうですね、行きましょう」

私は真嶋さんの誘いに乗ると、早速麻生さんと泉さんの元に行き、事情を説明した。すると、

「俺も行くよ。何だかんだあいつには世話になっているし、返す恩もいくらかある。何しろ、あいつが風邪引いて学校を早退するなんて滅多に見れるものじゃない。顔を見に行かないと、きっと後悔する」

どう考えも後半のほうが本音っぽかったが、一応心配してくれているのだらうと思い、私は了承した。

「私も行くわ。あいつには散々バカにされたし、やり返さないときがすまないの」

どう考えても心配しているとは思えなかったのだが、きっと素直になれないだけで本当はとも心配しているのだと、勝手に解釈して、私は了承した。

結局同行者四人となってしまって、お見舞いには少し多い人数だと思うが、みんな彼が心配なのだと、半ば言い訳にも似た言葉を盾

にして、彼の家に向かった。

今度は彼が魔法にかかる番なのだ。私はとてもいい魔法にかかり、とてもいい夢を見させてもらった。だから彼にも最高の夢を見せてあげられるような、最高の魔法を掛けてあげたいと思う。

「成瀬さーん、来ましたよ！調子はどうですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2238k/>

偶然という名の奇跡5～雨と風邪と夢と魔法～Complete Version

2010年10月10日07時34分発行